令和元年度スポーツ庁委託事業

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業

実践事例集

令和元年度スポーツ庁委託事業

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業

実践事例集

目　次

１．実践事例集について …… 1

２．実践事例

スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び

福島市立蓬萊中学校（福島県） …… 3
土浦市立東小学校（茨城県） …… 5
つくば市立谷田部東中学校（茨城県） …… 7
栃木県立日光明峰高等学校（栃木県） …… 9
北杜市立小淵沢中学校（山梨県） …… 11
豊岡市立城崎中学校（兵庫県） …… 13
尾道市立因北中学校（広島県） …… 15

マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成

二戸市立金田一中学校（岩手県） …… 17
香取市立新島小学校（千葉県） …… 19
小松市立安宅中学校（石川県） …… 21
白馬村立白馬中学校（長野県） …… 23
蟹江町立蟹江中学校（愛知県） …… 25

スポーツを通したインクルーシブな社会（共生社会）の構築

釧路市立朝陽小学校（北海道） …… 27
福島県立いわき支援学校くぼた校（福島県） …… 29
鈴鹿市立桜島小学校（三重県） …… 33
滋賀県立国際情報高等学校（滋賀県） …… 35
岡山県立玉野光南高等学校（岡山県） …… 37
土佐市立新居小学校（高知県） …… 39
福岡県立育徳館中学校（福岡県） …… 41
熊本市立力合西小学校（熊本県） …… 45
霧島市立国分中学校（鹿児島県） …… 47
千葉市立誉田小学校（千葉市） …… 49
横浜市立北山田小学校（横浜市） …… 51
新潟市立鏡淵小学校（新潟市） …… 55
浜松市立都田中学校（浜松市） …… 57

日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成

宮城県鹿島台商業高等学校（宮城県）…… 59
高山市立清見中学校（岐阜県）…… 61
赤磐市立磐梨中学校（岡山県）…… 63
徳島県立徳島商業高等学校（徳島県）…… 65
大分県立別府支援学校（大分県）…… 69
札幌市立幌西小学校（札幌市）…… 71
静岡市立梅ケ島小中学校（静岡市）…… 73
神戸市立美賀多台小学校（神戸市）…… 75
北九州市立藤松小学校（北九州市）…… 77

スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

埼玉県立杉戸高等学校（埼玉県）…… 79
三条市立西鱈田小学校（新潟県）…… 81
小山町立須走小学校（静岡県）…… 83
一宮市立尾西第二中学校（愛知県）…… 85
京都府立南丹高等学校（京都府）…… 87
鳥取県立皆生養護学校（鳥取県）…… 89
萩市立大島小中学校（山口県）…… 91
高松市立木太南小学校（香川県）…… 93
西条市立ひまわり幼稚園（愛媛県）…… 97
宿毛市立咸陽小学校（高知県）…… 99
小竹町立小竹中学校（福岡県）……101

３．参考資料（筑波大学附属学校群）

筑波大学附属小学校……103
筑波大学附属坂戸高等学校……105
筑波大学附属久里浜特別支援学校……107

実践事例協力校一覧……111

実践事例集について

本事例集は、令和元年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」において、各地域拠点の推進校で実施されたオリンピック・パラリンピック教育の特徴的な事例を集約したものである。後述する５つのテーマ別に、全国の推進校から計 45 事例を抽出し、あわせて巻末には筑波大学附属学校群における３事例を掲載した。令和２年度以降の有意義な事業展開に向けた参考資料として、また 2021 年の東京大会を契機とした日本のオリンピック・パラリンピック教育に関する記録として活用されたい。

1．本事業の目的

東京 2020 大会の準備及び運営に関する施策の推進を図るための基本方針（平成 27 年 11 月 27 日閣議決定）において、政府は「大会開催を契機に、オリンピック･パラリンピック教育の推進によるスポーツの価値や効果の再認識を通じ、国際的な視野を持って世界の平和に向けて貢献できる人材を育成する」ことを決定した。また、文部科学省およびスポーツ庁で組織された「オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議（平成 27 年２月～平成 28 年７月）」の最終報告では、全国的なオリンピック・パラリンピック教育の普及の意義として、以下の内容が提示されている。

(1) スポーツの価値
- スポーツは、精神的な充足感や楽しさ・喜びをもたらし、人々が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む基盤。
- スポーツには、自己充実・自己変革を促す力、社会や世界を変える大きな力がある。

(2) オリンピック・パラリンピックの理念とオリンピック・パラリンピック教育の意義
- オリパラ教育の推進には、オリンピックの３つの価値（卓越 Excellence、友情 Friendship、敬意 / 尊重 Respect）とパラリンピックの４つの価値（勇気 Courage、決意 Determination、平等 Equality、インスピレーション Inspiration）が必要。
- オリパラ教育は、スポーツの価値の再認識を通じ、国際的な視野を持って世界の平和に向けて活躍できる人材を育成するもの。

(3) オリンピック・パラリンピック教育の具体的内容
- オリンピック・パラリンピックそのものについての学び（大会に関する知識、選手の体験・エピソード等）
- オリンピック・パラリンピックを通じた学び（スポーツの価値、参加国・地域の文化等、共生社会、持続可能な社会等）

本事業は、主に上記の内容および平成 27 年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント調査研究事業」の成果をふまえ、全国中核拠点（筑波大学、日本体育大学、早稲田大学）と地域拠点（各自治体教育委員会等）が連携し、学校や地域

一般におけるオリンピック・パラリンピック・ムーブメントを推進することを目的とするものである。

2．令和元年度の事業概要

令和元年度における全国中核拠点と参加地域拠点を以下に示す。各地域拠点では、担当大学の支援を受けながら、東京 2020 大会に向けたオリンピック・パラリンピック教育の実践を展開した。

筑波大学　　：宮城県、福島県、茨城県、群馬県、長野県、愛知県、京都府、和歌山県、島根県、山口県、徳島県、愛媛県、福岡県、京都市、北九州市
日本体育大学：北海道、栃木県、千葉県、新潟県、石川県、山梨県、兵庫県、岡山県、高知県、大分県、千葉市、新潟市、大阪市、神戸市、岡山市
早稲田大学　：岩手県、埼玉県、岐阜県、静岡県、三重県、滋賀県、鳥取県、広島県、香川県、熊本県、鹿児島県、札幌市、横浜市、静岡市、浜松市

また各推進校では、以下の５つのテーマに基づきオリンピック・パラリンピック教育が実践された。なお、同テーマはスポーツ庁および関係団体（内閣官房オリパラ事務局、東京 2020 組織委員会、東京都教育庁、日本オリンピック委員会、日本パラリンピック委員会、日本財団パラリンピックサポートセンター、筑波大学、日本体育大学、早稲田大学）から構成される「スポーツ庁オリンピック・パラリンピック教育全国中核拠点会議」において議論され、決定されたものである。

（本事業における「オリンピック・パラリンピック教育」のテーマ）

オリンピズムの教育的価値（努力から得られる喜び、フェアプレー、他者への敬意、卓越性の追求、身体・意志・知性の調和）、パラリンピックの価値（勇気、強い意志、インスピレーション、公平）の普及に向けて、以下のテーマを設定する。

Ⅰ　スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
Ⅱ　マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
Ⅲ　スポーツを通したインクルーシブな社会（共生社会）の構築
Ⅳ　日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
Ⅴ　スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

本事例集では、各地域拠点の推進校における「実践報告書」の文面を抜粋し、冊子体裁の都合上、一部編集・用語の統一を行っております。なお複製、転載等の際には、スポーツ庁による承認手続きが必要となります。

実践事例１　福島市立蓬萊中学校（福島県）

1 実践のテーマ

体育理論における最終聖火ランナー予想

2 対象者

第３学年　84 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：保健体育

4 目標（ねらい）

　国際スポーツ大会開催の意義について理解させることにより、東京オリンピック・パラリンピックに対する興味関心を高めるとともに生涯にわたりスポーツに親しむ心を育む。

5 取組内容

　単元名「体育理論『文化としてのスポーツの意義』」において、国際的なスポーツ大会が果たす文化的な役割とは何か考えさせ、理解させる授業を実践した。「東京 2020 オリンピックの最終聖火ランナーは誰だ！」という課題を設定し、聖火の歴史やその意味づけについて資料を提示し、最終聖火ランナーにふさわしい人物像やその条件を想像させた。そこからオリンピック開催の価値や意義をとらえさせた上で最終ランナーを予想する活動を行った。





6 成果

聖火リレーが地元福島県を皮切りに全国を巡回することもあり、生徒は聖火リレーの歴史や意味づけに関する資料や教師の話に関心をもって授業に臨んでいた。特に、歴代の最終聖火ランナーの資料についてはより興味深い様子であった。自分たちの知る人物から適任者を選ぶことは簡単ではなかったようであるが、世界平和や国際親善、人権尊重等の実現・進展がオリンピックや聖火リレーの役割の一つであることを理解し、最終聖火ランナーについて考える様子が見られた。

7 実践において工夫した点（特色）

聖火リレーが地元福島県を出発地とすることが決まり、福島市もルートの一部として選ばれる期待が高まる中、生徒の関心を高めるため、聖火リレーを切り口として国際スポーツ大会の意義について考えさせることとした。

8 課題等

学習内容・課題をいかに生徒に身近なものにしていくかが重要だと考える。身近なところから課題を設定する、授業の中で身近なものにしていくなど、学習内容と自分の生活経験や知識、生活空間や将来の生き方とのつながりを意識させることが必要であろう。

実践事例２　土浦市立東小学校（茨城県）

1 実践のテーマ

聖火リレー方式を活用した都道府県学習・紹介

2 対象者

全校児童　499 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：いちょう集会

4 目標（ねらい）

　スポーツ及びオリンピック・パラリンピックの意義について学び、興味・関心・意欲の向上を図る。

5 取組内容

【いちょう集会】
　日時：11 月 8 日（金）2・3 校時
　内容：第 4 学年による発表　「ニュース東」
　　東京 2020 オリンピックの聖火ランナーになって、47 都道府県を聖火リレー方式で回り、同時に名産物等を紹介した。そしてその様子を TV ニュースの中継方式で発表した。さらに、オリンピック競技も紹介した。









6 成果

聖火ランナーが走るコースや日程を調べることでオリンピック・パラリンピックへの関心が高まったと同時に、47 都道府県の名産物等を知ることができ都道府県にも興味をもつことができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○聖火ランナーが土浦市や日本全国を走るので、応援したい。
○オリンピックにはたくさんの競技種目があるので、知らせたい。
○社会で茨城県についてと都道府県名を学習し、日本全国の名産物を知らせたい。

この３つを発表するために、TV 中継方式をとり、アナウンサーが実況で、聖火ランナーが走っている都道府県の特産物を紹介し、競技種目の演技を見せてオリンピックに興味を持ってもらいたいと考えた。

8 課題等

○全校でオリンピックについて楽しめる企画を実施したかった。

実践事例３　つくば市立谷田部東中学校（茨城県）

1 実践のテーマ

総合的な学習の時間を活用した系統的な学習

2 対象者

第１学年　190 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　その他：総合的な学習の時間「つくばスタイル科」

4 目標（ねらい）

　東京オリンピック・パラリンピックを通して、多様性や国際理解、先端技術が社会に与える影響などについて考え、未来の社会に対して自分たちができることを考える。

5 取組内容

【つくばスタイル科の学習計画】
　単元名：自分に気付こう！実社会に触れて学ぶ
　　～東京 2020 オリンピック・パラリンピックを通して～
　第１時　オリンピックやパラリンピックはどのような人たちによって支えられているのだろうか。
　第２時　東京 2020 大会の開催に向けて、異なる文化や特徴をもった人たちを受け入れるために大切なことはどんなことだろうか。
　第３時　過去の競技大会ではどのような先端技術が生まれたのだろうか。
　第４時　2020 年の社会にあるとよい技術はどのようなものだろうか。
　第５時　パラリンピックとはどのような競技なのだろうか。
　第６時　共生社会を実現するために私たちにできることはどのようなことだろうか。
　第７時　東京 2020 大会で新しい競技場は必要なのだろうか。
　第８時　UD スポーツとは何だろうか。
　第９時　パラスポーツにチャレンジしよう。卓球バレー、ゴールボール、アイマスク体験（12 月４日（水）５・６校時）
　第 10 時　夢の紡ぎ方～岩渕幸洋さんの生き方から～
　　（12 月 11 日（水）５・６校時）





6 成果

○生徒はオリンピックやパラリンピックの意義について理解を深めることができた。
○どのような技術があったら便利かという視点でグループごとに話し合い、新たな技術製品についてプレゼンテーションすることで、伝える力を高めることができた。
○パラスポーツの体験を通して、障がいを抱えている人の気持ちを考えたり、観戦する際に気を付けるべきことについて思いをはせたりすることができた。
○岩渕幸洋さんの講演会を通して、パラスポーツの意義やヨーロッパに比べて日本のパラスポーツの知名度は低いこと、プロ卓球選手になるまでの過程などを知り、視野を広げることができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○パナソニックの教材を活用することで、生徒は興味・関心を持って授業に取り組むことができた。
○パラスポーツを体験する際に、生徒が主体となって司会や運営を行った。初めて体験することで手探り状態の中、生徒たちが話し合いながらルールの確認をしたり、問題が生じたら話合いのもと解決したりして、生徒の主体性を育むことができた。
○プロ卓球選手の岩渕幸洋さんの講演を聴くだけでなく、卓球部の生徒や希望者がラリーをする機会を設定し、プロ選手のレベルを肌で感じることができた。
○講師の先生と綿密に連絡を取り合い、本校のねらいに沿った講演会を実施することができた。
○学年通信やホームページを通して、本事業を保護者や地域の方々にアピールすることができた。

8 課題等

○パラスポーツを体験する際に、専門の指導者に教えてもらえる場を設定できると、パラスポーツに関する知識をより深めることができたのではないかと考える。
○外部機関が作成している教材を自校化してアレンジできると、ねらいに迫りやすくなるのではないかと考える。

実践事例４　栃木県立日光明峰高等学校（栃木県）

① 実践のテーマ

オリンピック・パラリンピックの意義や歴史を中心とした学習

② 対象者

全校生徒　118 名

③ 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：保健体育、スポーツ概論、英語
　行事名：オリンピック・パラリンピック教育講演会

④ 目標（ねらい）

　学校の教育活動全体を通してオリンピック・パラリンピック教育を推進し、スポーツの価値への理解を深め、フェアプレイ意識の涵養、国際・異文化理解などの資質・能力を養い、国際的な視野を持って世界の平和に貢献できる人材を育成する。

⑤ 取組内容

【教科】
　○保健体育［体育理論］（第１学年）
　　オリンピックとパラリンピックの歴史、オリンピズム
　○スポーツ概論（第３学年）
　　オリンピックの歴史、ドーピングとスポーツ、障がい者スポーツ
　○コミュニケーション英語Ⅰ（第１学年）
　　オリンピックの歴史、意義








【オリンピック・パラリンピック教育講演会】
「夢に向かって」金子宗弘氏（陸上十種競技）




6 成果

○年間を通して、授業の中にオリンピック・パラリンピックに関する情報を取り入れたり、映像やスライドなどのICTを活用したりすることで、オリンピック・パラリンピックへの機運醸成を図ることができた。
○講演会は、自らの競技に対する姿勢や、今後の進路について改めて見つめ直す有意義な時間となった。

7 実践において工夫した点（特色）

オリンピック・パラリンピックに関する資料や映像を活用し、授業を実施したこと。

8 課題等

○教育講演会の講師選定に時間を要したこと。
○事前事後の学習と他教科、領域を関連付け、計画的に実施していくこと。

実践事例５　北杜市立小淵沢中学校（山梨県）

1 実践のテーマ

オリンピック・パラリンピックの調べ学習とプレゼンテーション

2 対象者

第３学年　35 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　その他：総合的な学習の時間、体育委員会

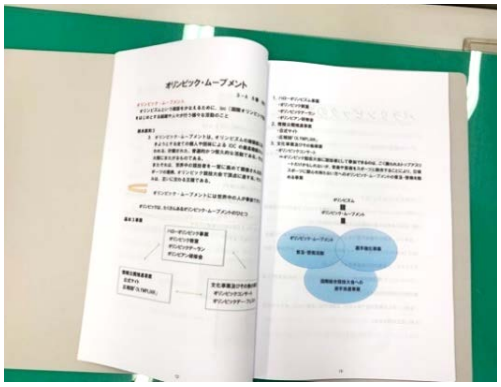
4 目標（ねらい）

　オリンピック・パラリンピックの歴史等を調べ、展示・発表することで興味を持てるようにする。

5 取組内容

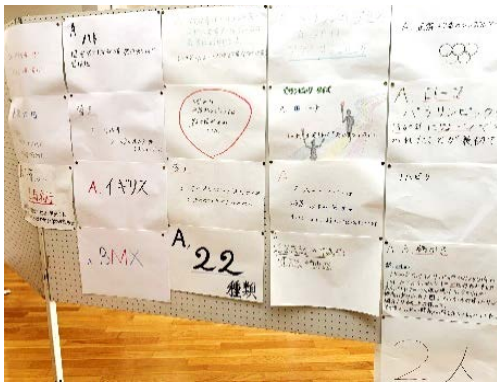
○オリンピック・パラリンピック関する調べ学習
　「オリンピック・パラリンピック」について調べ学習を行い、模造紙にまとめ、ポスターセッションを行った。作成した成果物は、他学年の生徒や保護者などにも見てもらうため、校舎内に掲示した。また、学習内容をワードでまとめ、冊子を作成し、互いに共有した。





○オリンピック・パラリンピッククイズの作成
　委員会活動の一環として、体育委員会でオリンピック・パラリンピック関連のクイズを作成し、玄関前のパネルに展示した。





6 成果

○ポスターセッションにおいては、仲間の発表に対し、質問や肯定的意見が飛び交うなど、学習成果を共有することができた。
○学習成果を校舎内に掲示することで、全校生徒・保護者・地域の方の目に留まるようにした。家庭でもオリンピックやパラリンピックの話題が出るなど、興味を持てるようになった生徒や家庭も多くあった。
○玄関前にクイズを掲示したことで、登校時や下校時にクイズを解いたり、三者懇談で学校を訪れた保護者が足を止めて、クイズに挑戦したりするなど、興味を持ってもらうことができた。保護者にもオリンピック・パラリンピックに興味を持ってもらうことで、家庭でもオリンピック・パラリンピックについての話題が上がるようになった。

7 実践において工夫した点（特色）

○スケートや馬術など、身近に世界で活躍する選手が存在するため、学習のスタート時に紹介することで興味を持つきっかけとしたこと。
○学校規模が小規模であるため、学年・教科で連携がとりやすい。授業での様子や委員会活動の様子を職員間で共有し、活動を評価・称賛することで生徒自身が積極的に取り組めるよう、全職員で取組を進めたこと。

8 課題等

○男女別ではなく、男女混合で行うことで集団づくりなどにも好影響となると感じた。学校の実態に応じて、より教育効果が得られるようなグルーピングを行うことが必要である。
○体育理論との関わりや取り組む時期を国際大会の前後とするなど、生徒が興味を持ちやすい時期に活動を設定すると良い。

実践事例６　豊岡市立城崎中学校（兵庫県）

1 実践のテーマ

ふるさと教育と関連付けたオリンピック・パラリンピックの学び

2 対象者

第１学年　25 名、第２学年　18 名、第３学年　25 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　その他：総合的な学習の時間、生徒会活動、講演会

4 目標（ねらい）

○オリンピック・パラリンピックの意義や歴史について学ぶことで、スポーツに対する興味関心を高める。
○講師の体験談から、様々な困難を乗り越え夢を実現した姿を学び、生徒自らの生活に役立たせる。また、支え合いや感謝する気持ちの大切さを学び、共生社会を実現しようとする意欲を高める。

5 取組内容

【オリ・パラ掲示板の設置】
　玄関と生徒昇降口に掲示板を設置し、生徒が作成した掲示物を継続的に張り出した。

【生徒会による「体育委員会だより」の作成、配布、校内掲示】
「体育委員会だより」を２回作成し、配布と校内掲示をした。





【福祉新聞作り】（第２学年 18 名：総合的な学習の時間）
　パラリンピックについてまとめた生徒の新聞を文化祭で展示した。



【オリ・パラ講演会】
　○講演会Ⅰ：「オリンピックの聖火とレガシー」上治丈太郎氏（公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会参与、豊岡市スポーツ特別アドバイザー）
　○講演会Ⅱ：「あきらめない心」伊藤真波氏





⑥ 成果

○豊岡市はドイツ、スイスのボート競技チームのキャンプ地であり、城崎が受け入れの中心地となる。本校ボート部は全国的に活躍しており、生徒は両チームの到着を心待ちにしている。そのような中での今回の取り組みにより、オリンピック・パラリンピックに対する興味関心を高めることができた。
○上治丈太郎氏からは組織委員会の立場からオリンピックの話を中心に、伊藤真波氏からはパラリンピックに関することを中心に話を聞くことができた。両名の講演を通して、多面的な学習をすることができた。

⑦ 実践において工夫した点（特色）

○新聞作りや生徒会活動等、生徒が主体的に取り組める活動を取り入れ、オリパラへの興味関心を高めたこと。
○講演は聞くだけにならないよう、講師への質問を事前に考えたり、講演後に感想を書いて生徒間で交流を行ったりしたこと。
○ふるさと教育と関連付けてオリパラ教育に取り組んだ。豊岡市は、ドイツ、スイスのボード競技チームのホストタウンであり、また、聖火リレーのルート地でもある。これらのことを豊岡市の素晴らしさとして生徒たちが誇りに感じられるよう、教育内容を工夫し、伝える内容を焦点化したこと。

⑧ 課題等

　本事業を福祉教育や特別支援教育に関連付け、取り組みを継続させることで、さらなる深化、充実させていくことが課題である。

実践事例７　尾道市立因北中学校（広島県）

1 実践のテーマ

修学旅行におけるオリンピック・パラリンピックについての学習

2 対象者

第２学年　52 名

3 展開の形式

【学校における活動】
行事名：修学旅行説明会
その他：総合的な学習の時間、特別活動、道徳

4 目標（ねらい）

○スポーツ及びオリンピック・パラリンピックの意義や歴史について学び、パラリンピアンの講演を通して、夢を持ちあきらめず努力することの素晴らしさや、グローバルな視野を持つことの大切さを知る。
○企業訪問を通して、東京でのオリンピック・パラリンピックを成功させるために企業がどのような取り組みを行っているかを知り、オリンピック・パラリンピックへの自分自身の関わり方や将来の自分の生き方を考えるきっかけとする。

5 取組内容

○全員がオリンピック・パラリンピックに関する内容を調べ、修学旅行班ごとにまとめ、クラスでプレゼンテーションし相互評価した。壁新聞を作成し、廊下に掲示した。





○修学旅行説明会で保護者にもオリンピック・パラリンピック教育推進事業の目的について周知した。その際、講演をしてもらうパラリンピアンについてビデオ紹介した。
○修学旅行先で、オリンピック・パラリンピック関連施設や企業を見学・訪問（オリンピックミュージアムを全員が見学し、班別の自主研修として都庁・国立競技場・選手村・有明コロシアム・有明テニスの森などを見学・訪問）
○パラリンピアンの講演（講師：二條実穂氏）および競技用車いすの試乗体験




○修学旅行後、「修学旅行新聞」を作成

6 成果

○事前・事後のアンケートでは、特にパラリンピックへの興味・関心が大きく高まり、運動やスポーツに興味を持った生徒も増えた。また、お年寄りや障がいのある人への意識に変化が見られたほか、日本の伝統や外国への関心も高まった。
○生徒の感想の中には、あきらめず努力することの大切さや、外国の人との交流、パラリンピックに関わってみたいとの記述も見られ、スポーツやオリンピック・パラリンピックの意義や歴史に関する学びを通してインクルーシブな社会、障がい者理解や多様性を尊重する態度の育成にもつながったと思われる。

7 実践において工夫した点（特色）

２月実施の修学旅行先が、半年後にオリンピック・パラリンピック開催を控え、まさに準備たけなわの東京方面であることから、現地で新国立競技場をはじめとするオリンピック・パラリンピック関連施設の見学や、オリンピアン・パラリンピアンの講演を盛り込むことで、効果的な取組が可能であると考えた。

8 課題等

○パラリンピアンの講演会は宿泊先ホテルで実施したため、スケジュール調整が厳しく、体験活動等が予想以上に時間がかかってしまった結果、質問を受ける時間が無くなった。また、終日の都内班行動の後に実施したため、生徒は相当疲労しており、やや集中力を欠くことになった。
○会場の制約のため、体験的な活動が競技用車いすの試乗に限られてしまった。

実践事例１　二戸市立金田一中学校（岩手県）

1 実践のテーマ

様々な教科を通した「いわての復興教育」

2 対象者

第１学年　49 名、第２学年　36 名、第３学年　55 名（合計 140 名）

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：保健体育
　行事名：運動会、文化祭
　その他：道徳、特別活動、総合的な学習の時間

【地域における活動】
　イベント名：二戸地区中学校総合体育大会、新人大会
　その他：二戸地区中学校駅伝競走大会

4 目標（ねらい）

豊かなスポーツライフの実現のための資質・能力の育成に向けて保健体育の授業の充実を図るとともに、カリキュラム・マネジメントの視点から、いわての復興教育を推進し、他の人々や社会のために役立ち自分が価値ある存在であることを実感できるようにする。

5 取組内容

【事前学習】
○保健体育
　年度初めのオリエンテーション（相手の立場を理解して公平、共生、協力、公正等の共有）
○道徳
　思いやり、感謝、相互理解、友情等を考えて議論する
○特別活動
　運動会（多様な関わり方の設定）
　文化祭（全校生徒による、いきる・かかわる・そなえる等を考える創作劇）
○地区中学校総合体育大会、駅伝競走、新人大会
　複数の会場を移動しながらの全校生徒による応援・サポート・大会進行補助



【オリンピアンによる講演会（講師：塚原直貴氏）】
　目標に向かって全力で取り組むこと、互いの理解を深めること、フェアプレイの大切さ発信力、傾聴力、実行力、考え抜く力の重要性等



【事後学習】
　〇保健体育
　　各領域における技能、態度、知識、思考・判断のバランスのよい指導と評価ならびにパラリンピックを取り上げた発展的な学習
　〇総合的な学習の時間
　　二戸市国際交流支援員によるガボン共和国選手への応援、おもてなし等の学習マナーアップ講演会（二戸地域振興センター職員による思いやりの心の大切さ等の学習）

6 成果

(1) 仲間を思いやり、協力して生活する生徒等の増加
(2) 社会や人の役に立つことをしたいと思う生徒等の増加
(3) その他
　〇いじめ認知件数の減少
　〇除雪作業の奉仕活動等に参加する生徒の増加
　〇全校生徒による演劇が評価され、令和３年度全国中学校総合文化祭への出演の依頼

7 実践において工夫した点（特色）

〇保健体育の各領域におけるバランスのよい指導と評価
〇いわての復興教育の推進（岩手だからできる教育、やるべき教育の実践の積み重ね）
〇カリキュラム・マネジメントの充実

8 課題等

　オリンピック・パラリンピック教育の推進のために必要な人的・物的な体制の整備とさらなる教育課程に基づく組織的・計画的な教育活動の質の向上

実践事例２　香取市立新島小学校（千葉県）

1 実践のテーマ

ようこそ新島へ　おもてなしプロジェクト

2 対象者

第３学年　18 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

　オリンピック・パラリンピック教育を通して、主体的に学び、他者理解を深める児童を育成する。

5 取組内容

　地域の観光地となっている「加藤洲十二橋」を訪れる観光客へ向けて、「初めて来た人に十二橋の良さを分かりやすく伝えるにはどうしたらよいか」「もう一度、十二橋に来たくなるようなおもてなしはないか」という二つの「おもてなし」に重点を置き、授業実践に取り組んだ。





○十二橋に関する調べ学習
○初めて来た人にもわかりやすいリーフレットおよび看板の作成
○リーフレットの発表






○リーフレットを観光客に見てもらえるよう、地域のお店に置いてもらう
○おもてなしメッセージの看板を十二橋に設置

6 成果

○今、自分たちにできる「おもてなし」を考えて実践することで、十二橋が今でも残っているのは、地域のたくさんの人々の努力があったことを知ることができた。
○学習に意欲的に取り組む児童や相手の立場に立って考え、活動する児童が増えたこと。

7 実践において工夫した点（特色）

○東京 2020 大会（スポーツ）だけを意識するのではなく、本校の総合的な学習の時間や地域の実態に即した活動内容にしたこと。
○「思考し、表現する力を高める実践モデルプログラム」を効果的に活用し、プロジェクトが円滑に進むように取り組んだこと。

8 課題等

○今後、より有意義な教育活動を展開していくために、他教科との関連を生かしたり、児童の実態に合わせた活動内容を工夫・改善したりする必要がある。
○取り組んだ実践を、他の学年に伝えたり広めたりできるよう、プロジェクトを再検討・再構築していく必要がある。

実践事例３　小松市立安宅中学校（石川県）

① 実践のテーマ

地域観光ボランティアガイド

② 対象者

第１-３学年　19名

③ 展開の形式

【学校における活動】
　その他：安中地域活性化倶楽部による観光ガイド

【地域における活動】
　イベント名：あたか祭（輪踊りへの参加コーディネート）

④ 目標（ねらい）

○郷土の誇りである安宅地区の観光ガイドを通して、郷土を愛する心、郷土への誇りの気持ちを高める。
○ボランティア精神を育み、おもてなしの心を醸成する。

⑤ 取組内容

平成30年に安宅町が日本遺産に認定された（北前船寄港地・船主集落）ことにより、ふるさとを知り、ふるさとを愛する活動を展開することになり発足された。活動の第一歩として、安宅の良さを発信することを目的として観光ボランティアガイドに取り組み始めた。活動２年目であるが、１・２年生を中心に、平成30年度は12名、令和元年度は19名が、安宅地域活性化倶楽部や曳舟保存会の協力のもと、定期的に活動している。











6 成果

郷土に残る歴史遺産や伝統文化を再認識することで、自らが伝統文化に関わり、伝えていこうという意識が芽生えた。

7 実践において工夫した点（特色）

地元で運営されてきた観光ボランティアや安宅地域活性化倶楽部との連携を密にとり、生徒への負担が過度にならないように日程調整をしながら、練習、準備、実施を行ったこと。

8 課題等

単独団体形式をとることなく、地域組織との連携を活動の軸としたボランティア団体として位置づけ、学校行事や委員会活動、部活動とかけ持ちしながらでも十分に活動可能な組織運営を行うこと。

実践事例４　白馬村立白馬中学校（長野県）

❶ 実践のテーマ

白馬中オリパラ DAY（トレイルラン大会運営及び参加、講演会の実施）

❷ 対象者

全校生徒　198 名

❸ 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：白馬中オリパラ DAY
　その他：特別活動、道徳

❹ 目標（ねらい）

　競技会の運営・参加およびパラスポーツ体験から、おもてなしの心やスポーツを楽しむ心の育成をはかる。

❺ 取組内容

日時：11 月 8 日（金）
内容：白馬中オリパラ DAY
　　8:00　生徒登校
　　8:15　オープニングセレモニー
　　8:30　白馬国際ミニオリンピックトレイルラン
　　11:00　北信越中学生駅伝大会壮行会
　　11:30　オリンピアン講演会
　　11:45　トレイルラン表彰式
　　12:30　PTA 親子人権講演会
　　13:30　パラスポーツ体験（ボッチャ）
　　15:50　まとめの会
　　16:00　生徒下校







6 成果

トレイルラン大会では、PTA・地域の人々・職員と共に運営にあたった実行委員の生徒には、大きなイベントを成し遂げることを通して、参加者へのおもてなしの心を醸成していく姿が様々な場面で見られた。また、参加者として出走した生徒からは、スポーツを楽しむ心を育んでいる様子が伺えた。

オリンピアン講演会や人権講演会では、その話の内容に励まされ、自分も頑張っていこうという気持ちを持つ姿が見られた。パラスポーツ体験では、インクルーシブな社会の構築に向けた考えを持つことができるきっかけとなった。

7 実践において工夫した点（特色）

○トレイルラン大会は、生徒実行委員（41 名）を中心に、PTA（29 名）、地域の人々（10 名）と共に運営したこと。
○トレイルラン大会は一般参加者も受け入れたこと。（103 名参加）
○トレイルラン大会は、様々な面で一般のイベントと同様の準備をして行ったこと。
○オリンピアン講演会は、卒業生である成瀬野生氏を招いて行ったこと。
○人権講演会は、村にゆかりのある元パラアスリートの夏目堅司氏を招いて行ったこと。
○ボッチャ体験は、PTA・職員も一緒になってクラスマッチ形式で行い、たくさんの人が一同に集まると共に、たっぷりと時間をかけて取り組めるようにしたこと。

8 課題等

今回のオリパラ DAY は、生徒にとって充実した 1 日となった。しかし、それが自分にとって、どうだったのかを感想等に充分に表現できない生徒が思った以上に多かった。この事を踏まえて、もっと日頃から生徒の心を動かし、生徒が様々な表現をしたくなるような毎日を送っていくことが必要なのではないかと思わされた。

スポーツを通じて心を開いていくことや、人と人との関わりを大切にしていくことが有効であることは、今回の取組で確認されているので、さらにこのような経験を重ねていけるようにしていきたい。

実践事例５　蟹江町立蟹江中学校（愛知県）

1 実践のテーマ

多様性や国際理解、おもてなしについて考える一連の取組

2 対象者

第２学年　177 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

（1）大会の意義とそれを支える人々
　世界的スポーツの祭典であるオリンピックやパラリンピックがどのような人たちによって支えられているかを考えることができる。
（2）多様性と国際理解 －おもてなしを考える－
　東京 2020 大会の開催にむけて、異なる文化や特徴をもった人たちを受け入れるために大切なことは何かを考えることができる。

5 取組内容

【事前学習（2 時間）】
　目標の（1）にむけて、東京 2020 大会を例に、各学級のグループでマインドマップを活用し、大会の意義と大会を支える人々について考えを広げた。また、オリンピックやパラリンピックについて知った。

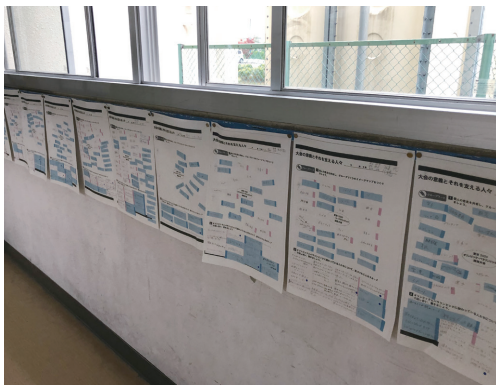


【問題解決学習（2 時間）】
　目標の（2）にむけて、世界からのゲストハウスの役割を果たすパナソニックセンター東京の”おもてなし”を例に、様々な側面からゲストにとっての問題を想像し、必要なおもてなしを考え、発表した。



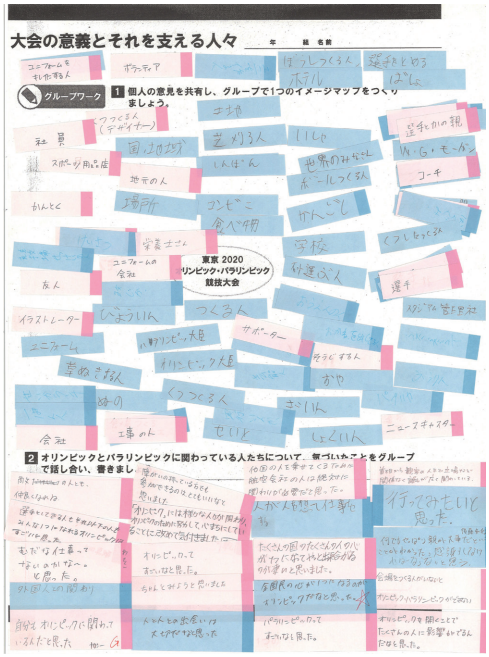
【事後学習（掲示発表）】

事前学習で作成したマインドマップや問題解決学習の発表で使用した紙面を廊下に掲示し、学級を超えて紹介し合った。



6 成果

○「オリパラの授業をもっと受けたい」「オリンピックを見に行きたい」などの声が多く聞こえ、興味をもつ生徒が増えたこと。
○たくさんの支えがあることや大会に関わる仕事をしている人の熱意を知り、広い視点でオリンピックを見つめることができたこと。また、生活の中にある多くの支えに気付くことができたこと。
○自分にできる「おもてなし」について考えることができたこと。また、仲間の「おもてなし」を聞き、考えを広げることができたこと。



7 実践において工夫した点（特色）

○パナソニックのオリパラ教材を活用した点。
○オリンピック競技の映像や東京決定の瞬間をおさめた映像、滝川クリステルさんのプレゼンの映像などを活用した点。
○学年（5学級）一斉授業にして、多くの教員で机間指導しながら、グループワークを活性化させた点。
○付箋を活用してまとめをした点。
○オリンピックの整備のために東京で働く生徒の保護者がいて、その話をした点。

8 課題等

○オリンピック・パラリンピックの開催にもっと近づいてから取り組むと、さらに効果が上がったと思う。また、首里城の火災やマラソン、競歩競技が北海道開催となったニュースがあったので、それに合わせた取り組みをしていくことができれば、さらによいと思う。
○より長い時間を確保できれば、よりよいと思う。

実践事例１　釧路市立朝陽小学校（北海道）

1 実践のテーマ

ホストタウン交流を活用した障がい者理解

2 対象者

全校児童　159 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：ベトナム選手団交流会
　その他：総合的な学習の時間、特別活動、道徳、全校朝会

4 目標（ねらい）

　オリンピック・パラリンピックへの興味・関心を高め、スポーツの価値への理解を深めるとともに、公正さの涵養や国際・異文化について理解を深める。また、多様性を尊重し共生社会の構築に向けた態度を育成する。

5 取組内容

【総合的な学習の時間における取組】
　釧路市社会福祉協議会と連携し、障がい者に関する疑似体験やパラスポーツ体験を行った。また、体験をもとに調べたり、まとめたりしたことを、パラスポーツ発表会において発表し、パラスポーツの精神や共生社会についての理解を深めるようにした。





【道徳における取組】
　パラリンピアンを教材として用い、より高い目標を立て、希望と勇気をもって強い気持ちで努力することについて考える学習活動を通して、道徳的価値についての理解を深め、道徳的な実践意欲や態度を育むようにした。



【特別活動における取組】

ベトナムのパワーリフティングチームとのホストタウン交流を通して、パラリンピックの精神や歴史について理解を深めるようにした。





【全校朝会】

北海道出身の南部忠平選手について紹介するなど、オリンピック・パラリンピックへの興味・関心を高めるようにした。

6 成果

○パラリンピアンを教材とした授業や、障がいに関する疑似体験、パラスポーツ体験、パラスポーツ発表会等を行ったことにより、スポーツの価値理解のみならず、スポーツを通じた共生社会の構築に関わる児童の意識を高めることができた。

○スポーツの意義や価値について触れることをねらいとした授業や、ベトナムからパラリンピアンを招聘したことにより、スポーツに対する興味・関心の向上及び国際・異文化理解につなげることができた。

7 実践において工夫した点（特色）

既存の教育課程にオリンピック・パラリンピックの取組を位置付けて実施したこと。

8 課題等

今年度の実践を踏まえ、６年間を見通した指導計画を作成する必要がある。

実践事例２　福島県立いわき支援学校くぼた校（福島県）

1 実践のテーマ

高等学校と連携した取組

2 対象者

全校生徒　31 名

3 展開の形式

【学校における活動】
教科名：保健体育
行事名：講演会

4 目標（ねらい）

○パラリンピックや障がい者スポーツの理解を深め、多様性の理解を図る。
○障がいのある者（くぼた校生徒）と障がいのない者（勿来高等学校生徒）が、スポーツを通して、互いに人格と個性を尊重し支え合い、相互に認め合える、豊かな人間性の育成を目指す。

5 取組内容

(1) くぼた校・勿来高等学校の意見交換会議
○推進テーマの決定「パラリンピックと障がい者スポーツを通しての多様性の理解」
○事業計画の検討及び実施日についての日程調整
(2) くぼた校教員による講義「オリンピック・パラリンピック競技の理解」（保健体育）
日時：12 月 3 日（火）：いわき支援学校くぼた校
12 月 9 日（月）：勿来高等学校
内容：「オリンピック・パラリンピックの概要及びボッチャ競技」について
※　勿来高等学校生徒については、くぼた校教員による出前授業形式での実施




(3) 外部講師による講演会

日時：12 月 12 日（木）いわき支援学校くぼた校、勿来高等学校　合同

内容：「パラリンピック競技の理解について」

講師：公益財団法人福島県障がい者スポーツ協会　増子恵美氏、丸山内雄大氏




(4) 講義・実技指導「ボッチャ競技の理解」（保健体育）

日時：12 月 11 日（水）いわき支援学校くぼた校（第 1 回）

12 月 12 日（木）、13 日（金）勿来高等学校（第 1 回）

12 月 16 日(月)いわき支援学校くぼた校､勿来高等学校　合同(第 2 回)

内容：第 1 回「ボッチャについて講義・実技指導」

第 2 回「試合形式による実技（交流及び共同学習)」

※　くぼた校教員による講義・実技指導

※　勿来高等学校生徒については、くぼた校教員による出前授業形式での実施

※　第 2 回については、くぼた校と勿来高等学校 1 年 1 組の交流及び共同学習とし、両校生徒による混合チームを編成して実施




6 成果

○「多様性の理解」をテーマに、昨年度から継続して、くぼた校が併設されている勿来高等学校と、「保健体育」における交流及び共同学習を柱に両校合同で実施した。それにより、両校の生徒たちが互いの良さに気付き、関わり合いながら、互いに人格と個性を尊重し合い、協力して活動しようとする態度を育むことができた。また、勿来高等学校では「ボッチャ」競技が定着し始め、授業での障がい者スポーツの指導に加え、体育祭の種目への追加も検討されるようになり、パラリンピック種目や障がい者スポーツが生涯スポーツとして捉えられ始めた。

○パラリンピック元代表選手を講師に迎えて、くぼた校・勿来高等学校の合同で講演会を実施し、ボッチャ競技の実技指導や障がい者理解についての内容の講話を行ったことで、両校の生徒共に、パラリンピックや障がい者スポーツについての理解が深まった。また、様々な障がいや個性のある人たちが、それぞれの形で競技に取り組んでいること、多くの支えがあって障がい者スポーツが成り立っているという話を聞き、「多様性」を理解する事の大切さに気が付くことができた。さらに、勿来高等学校の生徒については、障がい者への理解と共生社会の理解を深める機会となった。

○ボッチャ競技の講義・実技の授業、特に試合形式による実技では、両校生徒による混合チームを編成して実施したことで、互いの良さに気付く良い機会となり、チームの一員として、自然とコミュニケーションや協力をしながら活動することができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○本事業の実施にあたり、スポーツ・障がい者スポーツを通した共生社会の形成、そして実現という本校の目的があったことから、外部講師による講演会では、講演内容については「多様性の理解」キーワードに講演を依頼した。

○実際の講演では、「障がい者」の生活の困難さや、障がいをもつ人への接し方や支援の仕方等、実体験をもとに説明していただき、理解を深めることができた。また、両校の生徒が試合形式でのボッチャの体験を行ったことで、関わりが生まれ、互いを意識するいい機会となった。

8 課題等

○くぼた校側（障がいのある者）の視点では、今回の事業で、スポーツを通して他者に関心をもつことに繋がったように感じる。また、障がいへの理解・啓発を深めることができた。しかし、「関わりたい」という気持ちが高まった反面、接し方が分からないなどコミュニケーション面での課題が挙げられた。コミュニケーション能力を高めることに加え、自らの課題を解決する力を高めることが重要となるため、様々な教育活動と連携を図るとともに、自分たちがボッチャを教える立場として、地域の小中学生との交流の機会も検討の必要がある。

○勿来高等学校側（障がいのない者）の視点では、パラリンピックや障がい者スポーツに対しての関心が高まり、昨年度と比較して、「もっと交流したい」という感

想も増えたが、障がい者について知る機会が少なく、今後は交流及び共同学習の機会を増やすことや、両校の連携をさらに深め、共生社会の実現に向けた学習の充実が必要であると感じる。今回、両校の体育科の教師が中心となり授業を行ったが、普段から共生社会の形成及び実現に向けて、両校教師が研修する機会を設けて充実を図ることで、両校の生徒それぞれに対してより深まりある指導が実践できると考える。

○本事業を実施することで、オリンピック・パラリンピックを身近に感じ、興味や関心も高まってきたが、今後は自分たちが学んだ事を生かし、障がい者スポーツの普及や理解・啓発に向けて、どう参画していけるか手段や方法を具体的に示し、実現できるよう指導していくことも必要だと感じる。

実践事例３　鈴鹿市立桜島小学校（三重県）

1 実践のテーマ

人権教育と関連付けたパラスポーツに関する学習

2 対象者

第４学年　151 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

○自分たちの周りの「心の安心・安全を守る」ためにどのような施設があるのかを知る。
○障がいを乗り越え世界で活躍する人々の思いや苦労に触れる。
○福祉体験を通して、自分のことだけではなく、周りのことも大切にするためには自分たちにできることは何かを考える。
○見学、学習、体験から得たことを自分の言葉でまとめ、周りに発信する力を養う。

5 取組内容

○鈴鹿市人権センターへの訪問





○オリンピック・パラリンピックに関する指導
　オリンピック・パラリンピックの歴史、東京 2020 大会でのピクトグラムの説明、パラリンピックで使用される様々な道具（義足、タッピング棒、ランプスターター）の説明、競技を支える人（コーラー）の説明クイズ、パラリンピアン（細川氏）人物、競技紹介

○パラアスリートによる講演
講師：パラ水泳　細川宏史氏
NHK による取材ビデオの視聴、講話を受けて感想・質疑応答




○振り返りと福祉体験及びポスター発表
講師：社会福祉協議会の方





6 成果

○事前・実践・事後を計画的に進めることで、子どもたちも「見学・学習・体験・発信」をスムーズに行うことができた。
○実体験を聞くことで、どれほどの努力が今につながっているのかを子どもたちは感じ取ることができた。
○身近にあるバリアフリーやユニバーサルデザインに興味を持つようになってきた。

7 実践において工夫した点（特色）

○鉄道を利用して人権センターに校外学習へ行くことができた。
○社会福祉協議会の方を講師として招き、「アイマスク体験」、「白杖体験」、「車椅子体験」を行った。また、障がいを持った方々の思いを聞くことができた。

8 課題等

○行事との兼ね合いを考え子どもたちがより興味を持てる時期に設定する。
○事業展開にあたって、するべきことを計画的に進めるよう、細かに計画を立てる。
○障がいを持った方が来校しやすい環境を整える。（スロープなどの設備や教室設定等）

実践事例４　滋賀県立国際情報高等学校（滋賀県）

1 実践のテーマ

体育理論におけるパラリンピックに関する学習

2 対象者

第１学年　229 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：保健体育

4 目標（ねらい）

　パラリンピック（歴史、進化、記録、用具、工夫、サポートする人）について学び、考える。また『共生社会』についても考える

5 取組内容

○パラリンピックの映像視聴
○パラリンピックが始まった経緯や歴史、進化について
○「パラリンピックに参加する国や地域が増えたのはなぜ？」について話し合い
○記録、用具、工夫、サポートする人についてクイズ形式で学習
○東京 2020 パラリンピックに向けて
○個人の意見をまとめる

指導のポイント
　○東京 2020 パラリンピックにどのような形で参加できるだろうか「する」「見る」「支える」「知る」の観点で考えよう。
　○東京 2020 パラリンピックをきっかけに社会はどのように変わっていくべきか考えよう。
　○『共生社会』について自分の考え、自分ができること、やっていきたいことを考えよう。

6 成果

どうしても、オリンピックに注目が行きがちだが、学習を通してパラリンピックについての知識、理解が深まり生徒が興味を持つことが出来た。

≪生徒記述より≫

●東京 2020 パラリンピックにどのような形で参加できるだろうか「する」「見る」「支える」「知る」の観点で考えよう

〇ボランティアに参加する
〇 SNS での情報発信
〇パラリンピック種目について調べたり、体験をする

●東京 2020 パラリンピックをきっかけに社会はどのように変わっていくべきか考えよう

〇「違い」を認め合える社会になっていくべき
〇東京 2020 大会では TV 放映をできる限り多くし大衆の関心を引くことが大切
〇パラリンピックもオリンピックと同じくらい盛り上がることが必要
〇バリアフリー、ユニバーサルデザインのさらなる活性化
〇すべての人への雇用条件、労働条件の改善
〇障がい者福祉に係る予算の増額

●『共生社会』について自分の考え、自分ができること、やっていきたいことを考えよう

〇困っている人を見かけたら、ためらわずに声をかける
〇障がいを持っている人と一緒に、パラスポーツをする
〇国際理解に努め、それぞれの文化・考え方・宗教などを知りたいと思った知ることによりそれが受け入れることにつながる

7 実践において工夫した点（特色）

〇パラリンピックに興味を持つよう、映像や写真を多く取り入れた。その際、「I' mPOSSIBLE」の資料が大いに役立った。
〇パラリンピックの理解にとどまらず、『共生社会』について考える時間を持った。

8 課題等

『共生社会』についてはもっと範囲を広めた内容（障がいだけでなく、国･宗教･人種・性など）について考えるための資料・時間を準備すればさらに深い学びにつながった。

実践事例５　岡山県立玉野光南高等学校（岡山県）

1 実践のテーマ

体育科の授業特性を活かしたオリパラ学習

2 対象者

第３学年　体育科　76 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：専門体育、体育指導法
　行事名：講演会

【地域における活動】
　その他：地域ワークショップでの発表

4 目標（ねらい）

　オリンピック･パラリンピック教育を実施することにより、生徒のオリンピック･パラリンピックへの関心を高め、スポーツの価値や効果の再認識を図るとともに、規範意識の涵養、国際・異文化理解、共生社会への理解等を深める。

5 取組内容

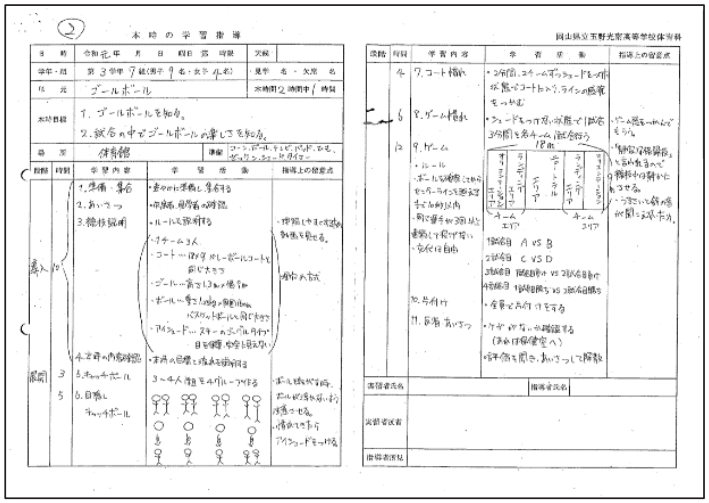
○冬季パラリンピック金メダリスト新田佳浩氏による講演会
○岡山デビルバスターズによるブラインドサッカー講習会
○オリンピック調べ、文化祭でのオリンピック・パラリンピックの紹介
○体育指導法における障がい者スポーツの授業
○地域ワークショップのへの参加および生徒による発表











6 成果

〇様々な取組を通じて、相手を認め思いやり、相手のことを考える「共生の意識」が養われたと感じる。
〇新田さんの講演会からは、「不可能とは可能性だ」という言葉から健常者である私たちが逆に力をもらい、ブラインドサッカーの講習会では、サポートすることの大切さを、身をもって感じることができた。
〇オリンピック・パラリンピックの歴史を調べ展示し、文化祭での体験ブースを設置することで、来年度に迫った東京 2020 大会への興味・関心をさらに高めることにつながった。
〇体育指導法によるパラスポーツの授業では、指導案作成時から、各種の専門種目以上に安全面に気を配ること、言葉を選び適切に伝えること、コミュニケーションを十分に取り達成感を味わわせることなど多くの気づきと工夫があった。

7 実践において工夫した点（特色）

岡山県唯一の体育科を持つ高等学校に沿った、本校にしかできない展開を考えること。（生徒が先生役となる体育指導法への導入、ブラインドサッカーの講習会の時期など）

8 課題等

活動が複数グループかつ長期間に及ぶため、活動場所の確保が困難となったり、障がい者スポーツの用具が足りない場面もあった。

実践事例６　土佐市立新居小学校（高知県）

1 実践のテーマ

共生社会の構築を目指した障がい者理解

2 対象者

第５学年　６名

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：心の教育参観日
　その他：総合的な学習の時間、特別活動

【地域における活動】
　イベント名：土佐市社会福祉大会

4 目標（ねらい）

○東京 2020 大会に向けて、オリンピック・パラリンピックへの理解を深める。
○共生社会の構築をめざして、他者への理解、特に障がいのある人への理解を深め、互いに支え合おうとする態度を育てる。
○パラスポーツを体験し、スポーツを楽しもうとする心を育てる。

5 取組内容

○オリンピック・パラリンピックへの理解
　「I’ mPOSSIBLE」を活用し、学習を行った。
○アイマスク体験・車いす体験
　目が見えないことでの不安感や不自由さ、介助があることでの安心感や有難さを実感することができた。車いす体験では、避難所に車いすで向かおうとしたが、坂が急なため、地震が起きた時には介助なしではとても避難できないことを感じさせられた。
○ボッチャ体験
○盲導犬と生活している方との交流
　盲導犬と生活している方を招き、盲導犬との生活の様子、障がいのある人との接し方を学んだ。児童は、盲導犬を見たら静かに見守ることや、障がいのある人を差別することなく、困っていたら声をかけ、手助けすることなどを学ぶことができた。



○全盲のシンガーソングライター堀内佳さんコンサート（心の教育参観日）
○学習のまとめ・発信
　学習のまとめとして、朗読集会で全校児童にこれまでの取組や学んだこと等を発表するとともに、土佐市社会福祉大会でも大勢の参加者にこれらを発信した。





6 成果

○児童はオリンピック･パラリンピックへの理解を深め、パラスポーツ（ボッチャ）を体験し、その楽しさを実感することができた。
○出会いを通してその方の生き方から学び、体験を通して、障がいのある人に対する理解や共感を得ることができた。
○障がい者理解の学習と重ねて実践することで、共生社会をつくっていくために自分たちは何ができるのかを考えるきっかけとなった。

7 実践において工夫した点（特色）

○第５学年児童が年間通して行う福祉学習のなかに、オリンピック･パラリンピック教育を組み込んだこと。
○座学だけでなく、体験学習や人との出会い（交流）を盛り込むことで、児童に気づきを与え、自ら実感できるような学習にしたこと。

8 課題等

○福祉学習としては１年間を見通して行うことができたが、オリンピック・パラリンピック教育については実施期間が短く限られていたため、見通しをもって計画的に実践することが難しかった。
○第５学年児童の取組を全校に広げる手立てが必要である。

実践事例７　福岡県立育徳館中学校（福岡県）

1 実践のテーマ

保健体育（陸上競技）におけるブラインドマラソンの実践

2 対象者

第１学年　120 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：保健体育

4 目標（ねらい）

○保健体育の陸上競技「長距離走」の単元の中で、オリンピックやパラリンピックの種目内容を加味した学習を取り入れ、東京 2020 大会に向けて興味を持たせる。
○視覚障がい者とサポート者の両方の体験を通して、共生の心を持たせるとともに、競技者だけでなくサポーターとしてスポーツに関わり合うことができることに気づかせる。

5 取組内容

【1 時間目】
（1）オリンピックのことについてどんなこと知ってる
　プレゼンテーションにて、オリンピック・パラリンピックのロゴマークやピクトグラムをクイズ形式にしながら、導入時の簡単な知識の注入と興味・関心につなげ、（2）の活動への動機づけを行った。





(2) 視覚障がい者の体験をしてみよう①

男女それぞれペアにし、視覚障がい者疑似体験側とサポート側に分かれて、体育館の両端にコーンを置き、直線を走る活動とスラローム走等を行った。サポート側の生徒には、相手のことを思いながら誘導するように指示をした。また、視覚障がい者疑似体験側の生徒には、「怖ければ歩いてもよい」ことと「怖くなったら目を開けてもよい」ことを事前に伝えた。







【2 時間目】

(3) 視覚障がい者の体験をしてみよう②

体育館での活動を終え、次の時間（2 日目）、実際に校内のコースで行った。1 周 500 mのコースの長い直線にハードルを不規則に並べ、当たらないように誘導しながら走る活動を行った。

サポート側の生徒には、視覚障がい者疑似体験者の恐怖心を緩和させるための様々な声かけをさせながら、誘導するように指示を出した。





6 成果

○（1）の事前アンケートの「2020 年に開催される東京オリンピック・パラリンピックを観戦しようと思うか」という質問では、4 割くらいの生徒が、「いいえ」と回答していたが、活動後のアンケートでは、「いいえ」と回答した生徒のうち、「はい」と回答が変わった生徒が、2 割程度と変化が見られた。

	事　前	事　後
は　い	６８．５％	７９．４％

○活動中の感想では、「とても怖かった」という感想がどの生徒の記述にも記載されていた。視覚障がい者疑似体験者は、「伴走者が信頼できないと走ることができない。」「今回体験して視覚障がい者のことが少し理解できた。」また、「障がい者の人に対して自分自身ができることをやってみよう。」など障がい者理解にもつながる記述もあった。

○（3）の活動後の感想では、「どのように声をかけたらよいのか分からなかった。」や「適切な声かけがあって安心した。」などの感想が非常に多かった。また、他の感想では、「今後、大会で伴走者をやってみたい。」という記述もあった

○今回の活動を通して、東京 2020 大会については、興味・関心を高めることができたと感じる。また、視覚障がい者の理解及び関わり合いの点についても学習を深めることができたと感じる。

7 実践において工夫した点（特色）

2 日間の活動がスムーズに行えるように、日程の調整を行った。その結果、活動の記憶が新しい状態で 2 日目の活動につなげることができた。その為、導入時の説明時間が短縮でき、生徒の活動時間を沢山確保することができた。また、広いスペースで活動ができたため、障がいを有する方々のことやサポートの仕方などの理解を進めることができた。

8 課題等

○今回活動は、保健体育の活動の中で行ったため、会議の時間を設定する時間が省略できた。他の教科等で行う際は、会議の設定、連絡調整などの様々な時間設定が必要になってくると考えられる。

○東京 2020 大会は、生徒にとっても身近なものであったため、スムーズな活動意欲につなげることができたが、今後の取り組み方については、学校全体で検討していく必要があると考える。

MEMO

実践事例８　熊本市立力合西小学校（熊本県）

1 実践のテーマ

パラリンピアンの講演を通じた「公正・公平」についての学習

2 対象者

全校児童　651 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：オリンピック・パラリンピック講演会
　その他：道徳、特別活動

4 目標（ねらい）

　本校児童が、パラリンピックのトップアスリートによる講話や実技体験（見学）を通して、夢の実現に向けてがんばることの大切さを実感するとともに、東京2020 大会の意義について理解を深める。

5 取組内容

　I’mPOSSIBLE を活用した道徳の授業（対象：５年１組、２組、３組）
　原市紘奈氏（東京パラリンピック女子車いすバスケットボール代表選手を目指している）を紹介し、特別ルールを考えることで、パラリンピックの１つのテーマである公平・公正についての意識を高めた。

○パラリンピアンを招聘しての講演会および実技交流会
　　講師：三阪　洋行 氏（ウィルチェアーラグビー）





6 成果

○道徳の授業後の感想（5年2組）

公平について考えたことは、公平はみんなが楽しめる良いことなんだなと思いました。また、公平にするためには、本人の気持ちに合わせないといけないので、少し難しいなと感じました。普段から公平にするために、いろいろな工夫をして、みんなが楽しめるようにしたいと思いました。

○オリパラ講演会での感想（特別支援学級）

ぼくが心に残ったことは3つあります。1つ目は「できない」じゃなく「どうすればできるか」ということです。工夫してできるようになることが、あきらめないことと関係していることを改めて感じました。2つ目は「たくさんのちがうに出会う」です。ちがうことに会うことが「わくわく」や「色々なことができる」ことに繋がっていくことが分かりました。3つ目は「続けることで夢がかなう」です。ぼくにも色々な夢があります。その中でも今日の話を聞いてパラリンピックに出てみたいなと思いました。今、教室でボッチャをやっています。パラリンピックの種目にもなっているので、三阪さんのように日本代表になりたいです。そのためにボッチャの練習を続けていきます。

車椅子ラグビーの実技はとても迫力がありました。今日はありがとうございました。

○今回でパラリンピアンの招聘事業は4回目になる。子どもたちのパラリンピックへの興味・関心は高まっているようだ。他の児童の感想にも、「たくさんの夢をもちたい。」「困難に負けない勇気が大切である。」という感想がたくさん出ていた。また、「東京パランピックを観たい。（応援したい。）」という気持ちになった児童が多数いた。

7 実践において工夫した点（特色）

○本校の教育目標「のびのびと力を発揮する子どもの育成」を意識し、事業を展開している。

○学校の隣にスポーツ施設（アクアドーム）があり、昨年の2月にパラアイスホッケー日本代表の強化合宿の歓迎セレモニーに参加した。また、世界女子ハンドボール選手権大会にも全校で応援に参加している。今回の事業でさらにオリンピック・パラリンピックへの関心や理解が高まっている。

8 課題等

○このオリンピック・パラリンピック・ムーブメント事業を核とした学校独自の横断的カリキュラムを確立していくことが課題である。

○高学年・中学年・低学年のねらい（目標）をはっきりさせて事業に臨む必要があると感じている。

実践事例９　霧島市立国分中学校（鹿児島県）

1 実践のテーマ

パラリンピアンの講演を中心とした道徳の授業

2 対象者

全校生徒　567 名、保護者　30 名

3 展開の形式

【学校における活動】
教科名：保健体育
行事名：国中 5F
その他：総合的な学習の時間、道徳

4 目標（ねらい）

○オリンピック･パラリンピックの意義を学び、国際平和や他者理解、他者と協力･共存していこうとする態度を育てる。
○パラリンピアンの考えや生き方に触れることで向上心をもち、夢や目標を定め、これから自分の人生をよりよくしていこうとする姿勢を育てる。
○目標を設定し、それに向かって努力することで体力や気力をつけ、達成感や自己肯定感を持たせる。

5 取組内容

○道徳
パラリンピアンによる講演会（全校生徒、参加希望の保護者）
共生社会の実現をテーマとする授業（3 年 3 組　37 名）
道徳教科書の「No Charity, but a Chance!」の活用






テーマⅢ

○保健体育（第 1.2 学年全員）
　1km 走のタイム測定
○総合的な学習の時間（3 年 5 組　38 名）
　東京 2020 大会に出場予定のアスリートのモザイクアートを作成



6 成果

○オリンピック・パラリンピックについて興味を深め、特にパラリンピックについての意義や競技について知識を深めることができた。
○パラリンピアンの生き方に触れ、「自分も夢に向かって頑張りたい。」「人生を楽しみたい。」という前向きな姿勢が感想文から読み取ることができた。
○１Ｋチャレンジをきっかけに体力をつけようと始業前の朝ランニングの参加者が増えた。

7 実践において工夫した点（特色）

○学校教育目標及び本校のキャッチフレーズと本事業をつなげ、本校の目指す生徒像の具現化を図ることを意識した教育活動として職員で共通理解や実践を図った。
○車いす体験やパラリンピアンとの触れ合いを通して、本校の校訓である「友愛」「協調」を意識させ、様々な人との共生社会を目指す心情を育てた。
○ 1K チャレンジ、朝ランニングを学年・学級で推進してもらい、学校全体が「克己」の精神を育み、体力向上だけでなく学力向上にもつなげようとした。

8 課題等

　今年度になってから事業に取り組むことになったので、日程調整や時数調整が難航した。来年度は道徳や総合的な学習の時間等、教育課程に編成し、計画的な取組をしていきたい。

実践事例 10　千葉市立誉田小学校（千葉市）

1 実践のテーマ

パラスポーツを軸とした教科横断的取組

2 対象者

第 1 学年　93 名、第 2 学年　80 名、第 3 学年　81 名、第 4 学年　99 名、
第 5 学年　91 名、第 6 学年　93 名、特別支援学級　19 名

3 展開の形式

【学校における活動】
教科名：体育、外国語
行事名：わくわくフェスティバル
その他：総合的な学習の時間、道徳、生活単元学習

4 目標（ねらい）

「意欲的に学ぶ子どもの育成
～オリパラ教育を柱とした学びのつながりを意識して～」
目指す子ども像：問題や課題を解決したい、成し遂げたいというこだわりを持って学んでいる子ども
視点 1：子どもの実態に則した単元開発や単元計画の工夫
視点 2：自己決定を促す手立ての工夫

5 取組内容

○第 1 学年「あきリンピックをしよう」
身近に感じたオリパラを素材として、遊びを考えた。遊び自体に夢中になることだけでなく、遊びの工夫や人との関わり合いの広がりを意識し、学習を進めた。

○第 2 学年「ボール転がしゲームをしよう」
「I' mPOSSIBLE」の映像資料を活用して、ゴールボールの競技、千葉市で開催される競技であることを学ぶ。単元の最後は今まで行っていたボール転がしゲームを目隠しして実践することで、ゴールボールの特性を味わえるように意識して実践した。

○第 3 学年「オリパラマスターになろう」
「相互にかかわりあうこと」に重点を置いた。ガイドランナーを題材にすることで、一方的に支えるのではなく、支えられる側も困っていることを伝えることで、相互の理解が深まりかかわり合いが充実すると考え、実践した。

○第４学年「ようこそ、誉田バリアフリー」
　実際にパラリンピアンが学校に来たらという主題で、「I’mPOSSIBLE」を活用しながら授業を実践した。
○第５学年「楽しさ広がるパラスポーツ」
　パラスポーツで広がった関心から世界へとつなげ、世界各国の文化や建物、歴史、言語など国際理解につながるような形で学習を実践した。
○第６学年「ROAD TO 2020」
　自分たちが調べたいテーマに基づき、スライドなど表現方法を工夫しながら発表した。また、委員会活動などの特別活動を通して、パラスポーツの魅力を全校に発信した。
○特別支援学級「オリパラで広がる世界。ボッチャでつながろう」
　オリパラに関する学習からボッチャを知り、ボッチャマスターを目指した。特別支援学級合同の宿泊学習では本校児童が主体となりボッチャ大会を行った。校内の交流学習ではボッチャを実践し、特別支援学級のフェスティバルでは、地域の人とボッチャを通して関わることができた。

6 成果

○オリンピック・パラリンピックの対する興味関心の向上
○実生活における、友人関係の変化
○ボランティア意識の向上
○オリンピック・パラリンピックに対する知識量の増加
○ハンデキャップにとらわれない共生の考えの根付き
○パラスポーツを楽しむ心の芽生え



7 実践において工夫した点（特色）

○「I’mPOSSIBLE」映像資料の活用
○ゴールボール、ボッチャセット、競技用車いすなど実物の活用
○学級、学年を越えた実践での交流（特別支援学級となど）
○フェスティバルなどでの地域との交流

8 課題等

○実践が始まる前年度に各教科の年間計画を整理し、特別教室割り当てなども考えながら事前に計画的に準備をする必要がある。
○系統的な各学年の横のつながりだけでなく、縦のつながりを意識することで学びが深まると考える。学年によって差が出ないように全体を考えて計画を立てる必要がある。

実践事例 11　横浜市立北山田小学校（横浜市）

1 実践のテーマ

ホストタウンを活用した国際交流

2 対象者

全校児童　502 名

3 展開の形式

【学校における活動】
教科名：国語
その他：職員研修、英国との交流、アスリートとの連携、総合的な学習の時間、道徳、特別活動

【地域における活動】
イベント：各種大会観戦、PTA 主催ふれあいまつり
その他：キャンペーン等への応募

4 目標（ねらい）

○障がいの有無にかかわらず、共に力を合わせて生活できる共生社会を実現するため、障がい者理解の学習・体験や障がい者との交流を通じ、多様性を理解し、心のバリアフリーを浸透させる。
○スポーツへの興味・関心を高め、様々なスポーツを体験することにより、児童にフェアプレーやチームワークの精神を身に付けさせるとともに、自己の体力向上に繋げる。

5 取組内容

○国語：オリンピック・パラリンピックのピクトグラムを活用（第 3 学年）
○総合的な学習の時間：オリンピック・パラリンピックの競技等について調べ学習、外部講師によるゴールボール体験授業（3 年 3 組）、「I'mPOSSIBLE」を活用したオリンピック・パラリンピックについての学習（4 年 1 組）、点字や視覚障がい、聴覚障がいなどの障がいをテーマとした学習（4 年 3 組）
○ジャパンパラ水泳競技会練習見学（第 4 学年）
○横浜国立大学障がい者スポーツ体験プログラム・キャラバンにて、車いすバスケットボール、ゴールボール、ブラインド・ウォーキング／ジョギングの出前授業
○障がい者スポーツ体験会
○道徳：吉田沙保里氏を題材とした読み物教材を使用（第 5 学年）
○運動会：全校ダンスで、例年の地域の音頭「北山田音頭」を「東京五輪音頭」

に変更
○職員研修：個別支援級担任が特別支援学校での夏の研修会に参加
○ボッチャ体験：ボッチャメーカー（三和製作所）を講師に迎えて全職員を対象に実施
○英国水泳代表チームプレ事前キャンプへの参加
「歓迎セレブレーション」参加（第４学年）、「練習見学」（個別、第１～５学年）
「送迎ミニレセプション」




○ BBC スコティッシュ交響楽団によるワークショップと給食交流（第４学年）



○トップアスリートを含む５名の講師との交流および第 5.6 学年の各クラスとの給食交流
講師：渡邊文雄氏（障がい者上級指導員）、塚原賢治氏（元プロ野球コーチ）、
荒波翔氏（元プロ野球選手）、小野真由美氏（ホッケー）、
大橋雅貴氏（ホッケー）





○各種スポーツ大会観戦
ホッケー日本代表試合観戦（第４～６学年希望児童 16 名、保護者 15 名、教職員６名）
ワールドルドカップバレーボール 2019 横浜大会観戦（第 5.6 学年）
ジャパンパラ水泳競技会観戦（第１～６学年希望児童 24 名、保護者 30 名、教職員５名）

○ PTA 主催ふれあいまつり
　トップアスリートを含む 5 名の講師による授業の同日午後に行い、講師も参加
○ヤマトホールディングス東京 2020 大会応援メッセージ（68 名応募、1 名審査員特別賞）
○日本郵便　東京 2020 オリンピック・パラリンピック
　「日本代表選手団を応援！はがきでチャレンジ！はがチャレ」および「おうえんのちから」絵本プログラム　40 冊　国語部、図書部と活用について相談

6 成果

○英国水泳代表プレ事前キャンプに伴い、昇降口に写真を掲示したり、選手個人にメッセージを書いたりしたことで、後日行われた世界水泳の放送では自然と英国選手が気になったようであった。また、日本代表選手との交流、試合観戦、用具や器具に触れるといった本物との体験により競技に対する興味関心を高めることができた。
○パラリンピックや障がい者スポーツについての学習を通して福祉全般に対しても興味関心を持つことができた。また、様々な人や関係機関と繋がることができ、来年度以降への人的資源を確保できた。
○例年行っている PTA 主催のイベント「ふれあいまつり」に関連づけることによって、保護者や地域の方の理解や協力につながった。

7 実践において工夫した点（特色）

　横浜国際プールが徒歩圏内にあるという地理的条件を生かし、横浜国際プールを会場としたイベントや募集案内に対して積極的に関わった。課業時間、課業日以外の活動でも、希望者募集や保護者の引率依頼をすることができた。

8 課題等

○パラリンピック種目で体験できるものが限られたり、用具が高価であったりする。単なる体験だけで終わらないようなアプローチが必要である。
○各活動の事前事後の様子についても掲示物などにより見える化を図る。特に総合的な学習の時間で取り組んだようなものについては発表の場の確保をしていく。年間を通しての足跡をのこすことで、児童だけでなく、保護者や地域への情報発信にもなる。

MEMO

実践事例 12　新潟市立鏡淵小学校（新潟市）

1 実践のテーマ

パラリンピックの学習を通した学びの発信

2 対象者

第５学年　35 名、第６学年　31 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：体育
　その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

○パラリンピック種目のボッチャや車いすバスケットボールの体験を通して、スポーツを通じたインクルーシブな視点と社会の構築を図る。
○オリンピックとパラリンピックに対する興味・関心を高め、生涯を通じてスポーツや体を動かすことに親しむ児童の育成に努める。

5 取組内容

【事前学習】
　○ I’ mPOSSIBLE の活用：パラリンピアンが学校に来るとしたら
　○スポーツをすること、オリンピック・パラリンピックについて
　○日本国内で活躍する外国人スポーツ選手
　○生涯スポーツについて





【講演会】
○車いすバスケットボール：松永哲一氏
○ボッチャ：長谷川寿史氏



【学びの発信】
○児童会祭りの出店
　全校に広めることを目的に、シッティングバレーボールやブラインドサッカー、ボッチャなど、全校児童が楽しめるようルール等を工夫した体験ブースを設置した。
○委員会活動による校内掲示物作成とクイズ大会
○ CM の作成
　地域や家庭に広めることを目的に、新潟放送 BSN と協力して CM を作成・放映した。





6 成果

○パラリンピックへの興味・関心、パラリンピックのボランティアや応援に参加したいという思いが向上したこと。
○体育ではみんながより楽しめるようにルールを工夫したり、寄り添ったりする姿が以前よりも多く見られるようになったこと。

7 実践において工夫した点（特色）

○学校の実態（通常学級、特別支援学級、院内学級、通級指導教室）から、パラリンピアンを招待する授業を 2 回行ったこと。
○ゲストを招く前に事前学習を行い、児童の関心・意欲を高めたこと。
○他学年とも一緒に行い、より多くの児童が学習できるようにしたこと。

8 課題等

○車いす（20 台）を新潟県障がい者交流センターから運搬するため、ハイエース 1 台、ミニバン 2 台が必要だったこと。
○車いすの搬出入に多くの職員の手が必要となり、学校内が手薄になったこと。

実践事例 13　浜松市立都田中学校（浜松市）

1 実践のテーマ

パラスポーツを通じた「共生社会」についての学習

2 対象者

全校生徒　278 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：保健体育
　行事名：文化祭

4 目標（ねらい）

○パラリンピック種目を中心としたオリパラムーブメントについて学習したり、体験したりすることを通して、スポーツの持つ価値について知識や考え方を深め、生涯を通じてスポーツに広く親しむ資質を育てる。
○スポーツに取り組む上での態度や、スポーツを楽しむ心を育成する。

5 取組内容

○ I’mPOSSIBLE を活用した学習
　オリパラの歴史、リオパラダイジェスト映像などを視聴し、東京 2020 大会によって日本がどのように変化するかを考えたり、感想などを書いたりした。
○「パラスポーツ体験」（ボッチャ・ブラインドサッカー）
○「SDGs 関連オリパラ学習」
　講師：常葉大学　木村佐枝子氏
　「スポーツ SDGs すごろく」を使って学習を行った。サイコロを振って出た目の数だけ進んだところに書かれているオリパラ関連クイズに答えることでさらに知識を深めた。



○「展示」
　オリパラ関連のパネル展示や、書籍購読を通じて、オリパラについての興味を促し、理解を深めた。





6 成果

○事前学習やオリパラすごろくを取り組むこと、廊下のパネル展示などによって、生徒たちのオリンピックやパラリンピックに関する知識や興味を高めることができた。
○パラリンピック種目を実際に体験することで、生徒たちのスポーツを楽しむ態度が育成された。

7 実践において工夫した点（特色）

○今回は協力大学である常葉大学が、本校の学区にあるという恵まれた環境だったからこそ、運営がしやすかったという点が考えられる。
○ボッチャ体験は、講師が午前中の４時間で２つの学年を指導することができるよう、授業の入れ替えと、第 1.3 学年合同授業として行った。
○パネルの展示と関連書籍は本校の訪問者にも見てもらえるように、職員玄関に設置した。

8 課題等

○生徒たちの感覚として、楽しかったものの、それがパラリンピックのめざす「共生」について深い学びができたかどうかは少し不安が残る。実際にパラアスリートなどと交流できると良かったかもしれない。
○時数と人員の確保。今回は近隣の常葉大学から先生方が指導をしに来てくださったので、１時間でもより充実した内容になった。今後同じことを行うためには、やはり専門家に来ていただき、指導を仰げるとよい。また、指導される方が今回のように複数いることも大変良かった。
○事後指導を行うことができなかった。

実践事例１　宮城県鹿島台商業高等学校（宮城県）

1 実践のテーマ

震災復興を目指した取組に関する講演

2 対象者

第１学年　78 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：ビジネス基礎

4 目標（ねらい）

　2020 年のオリンピック・パラリンピックを視野に入れ、県内外はもとより海外からの観光者を誘致するための工夫を高校生の目線で考える。

5 取組内容

　第１学年は「商業を学ぶ上で、交流人口拡大の意義やオリンピック・パラリンピックをビジネスチャンスと捉え、前回の東京オリンピックの経済的成果を理解し、東京 2020 大会が地域へもたらす影響を考える」ことを目的に、講演活動を２回実施した。
　１回目は、宮城学院女子大学教授宮原育子氏による「観光の役割とインバウンド観光ビジネスについて」の講演を実施した。
　２回目は、福島イノベーション・コースト構想推進機構の西嶋利安氏による「震災復興を目指した取組」についての講演を実施した。東日本大震災で被災し、９年前の震災直後の姿を残している地域があること。その一方で、復興一丁目一番地として先進的な取組によりめざましい歩みを進めている地域が、オリンピック・パラリンピックを契機に諸外国からの訪問者を招くために実施している取組を知る機会となった。その中で、この地域でもできることは何か？を考える講演となった。



日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成

6 成果

講演前にはそれほど興味関心がなかったオリンピック・パラリンピックだったが、この大イベントによる訪日外国人の経済効果や、地域にもたらす様々な影響を考える良い機会となった。

7 実践において工夫した点（特色）

講演前の事前学習として本校職員による「観光とは何か？」について授業を行った。

8 課題等

特になし。

実践事例２　高山市立清見中学校（岐阜県）

1 実践のテーマ

Assistant Language Teacher を活用したスポーツの国際交流

2 対象者

全校生徒　75 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：英語
　その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

　様々な国で人気のスポーツを Assistant Language Teacher（以下、ALT）から学び、体験することで、スポーツへの興味を高めること。

5 取組内容

○英語の授業（コミュニケーション中心）
　第１学年：「たくさんの ALT に自分を知ってもらおう」
　第２学年：「日本と母国の ALT の生活の違いを知ろう」
　第３学年：「ALT に高山の文化や食事を伝えよう」
○交流給食（ALT と一緒に給食）







○ ALT によるスポーツ紹介＆体験
ブース１：「レゲエダンス」（ジャマイカ出身 ALT 担当）
ブース２：「アメリカンフットボール」（アメリカ出身 ALT 担当）
ブース３：「アイスホッケー」（カナダ出身 ALT 担当）
ブース４：「ラグビー」（ニュージーランド出身 ALT 担当）





6 成果

○観光都市高山の市民として、「多様性」を理解することができた。
○日本になじみのないスポーツに親しむことができた。
○ラグビーではスポーツのルールだけでなく、そのスポーツの根底に流れる精神性などにも触れることができ、異文化理解が深まった。

≪生徒の感想から≫
○ラグビーとアメリカンフットボールの違いが初めて分かった。
○レゲエダンスはやりたくなかったけど、先生の熱心な指導やキレのある動きに魅了されて、みんなで盛り上げて取り組むことができた。先生は特別にダンスがうまいというわけではなく、ジャマイカではみんな当たり前のようにあの動きができると知って驚いた。

7 実践において工夫した点（特色）

○昨年度実施した「インターナショナル・デイ」を一部改変した事業であり、実施にあたって昨年度のノウハウを生かして準備を進めることができた。
○昨年度に引き続き、高山市教育委員会の全面的な協力により、市内ほぼ全ての ALT が本校に終日勤務できる体制が整った。
○午前に授業、午後にスポーツ体験と多くの時間を ALT と関わる日程にし、昨年度と同様に「インターナショナル・デイ」と銘打って生徒のモチベーションを高めた。
○午前中に英語の授業としてのコミュニケーション活動を位置付けたことで、初対面の ALT とも和やかな雰囲気で臨むことができた。

8 課題等

事前に、体験するスポーツのルールや歴史などを学んでおけば、限られた時間をより有効に使うことができた。

実践事例３　赤磐市立磐梨中学校（岡山県）

1 実践のテーマ

ホストタウンを活用した国際交流

2 対象者

全学年　186 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：講演会、試合観戦

4 目標（ねらい）

　日本ホッケー界のトップクラスで活躍している本校の卒業生（講師）から、今日に至るまでスポーツを通して学んだことについての話を聞き、今後の人生設計に役立てる。

5 取組内容

○ニュージーランド代表女子ホッケーチーム事前キャンプ歓迎式参加
○全日本ホッケー選手権大会試合観戦
○女子ホッケー社会人チーム所属選手（卒業生）による講演会









6 成果

○外国（ニュージーランド）の選手と接することにより国際交流を体験し、コミュニケーションのスキルが向上した。
○日本のトップクラスの試合を観戦することにより、選手達の体力・技術・チームワーク・メンタル面の強さ等を間近で感じることができた。
○自分たちの先輩でもある現役選手から話を聞くことで、より身近に感じさせることができた。
○自分たちの地域とスポーツの結びつき、スポーツによって得られる交流の広がりを体験することができた。

7 実践において工夫した点（特色）

学校近隣にホッケー場が整備されており、本校でもホッケー部が活動しているほか、ホッケーは地域を代表するスポーツとして定着している。また、赤磐市もニュージーランド代表チームのキャンプ地となっている。こういった地域の環境・事情を生かして実践を行ったこと。

8 課題等

○同様の事業を行う場合、自分たちの住む地域を代表するスポーツがあるかどうかが肝要である。
○スポーツに興味がない生徒もいるため、無条件なスポーツ礼賛ではなく、あくまでも人が打ち込んでいるものの一つとしてスポーツがあるという視点は指導する必要がある。

実践事例４　徳島県立徳島商業高等学校（徳島県）

１ 実践のテーマ

校外イベント（徳商デパート）におけるホストタウンに関連した出店

２ 対象者

第３学年　課題研究選択者　70 名
第２学年　商業科４クラス　140 名
※ステージ参加：吹奏楽部、歌唱など　約 150 名／運営サポート：ビジネス研究部　30 名

３ 展開の形式

【学校における活動】
教科名：課題研究（第３学年）
商品開発・ビジネス経済・マーケティング（第２学年）

【地域における活動】
イベント名：徳商デパート

４ 目標（ねらい）

○商業高校生として起業家精神及びビジネス活動に不可欠な基礎的・基本的な資質・能力を養う。
○地元企業などと連携した街の活性化支援の取組を通して、地域貢献できる実践力を養う。今年のテーマは「温故知新～未来をつなぐホストタウンストーリー～」。徳島県では東京 2020 大会において「ドイツ」「カンボジア」「ネパール」のホストタウンを務めており、本校はカンボジアとの関係が深いため、徳商デパートでも盛り上げていく。

５ 取組内容

【事前学習】
第３学年の課題研究では、週３時間の授業時間を５月から９月まで準備期間として行った。第２学年の商業科の各授業においては、週に１～２回程度を事前学習に充てた。

【徳商デパート】
今年のテーマは、「温故知新～未来へ繋ぐホストタウンストーリー～」であり、徳島県がホストタウンを務める「カンボジア」「ドイツ」「ネパール」「ジョージア」と連携させた商品を開発し、第２学年商業科４クラス、第３学年課題研究

選択者が徳商デパートに参加し、本部、店舗、イベント、ステージの４つのグループに分けて行った。

(1) 第１回徳商デパート

○日時：10月13日（日）

○場所：鳴門ポカリスエットスタジアム
（徳島ヴォルティスのホームプロデュースイベント「スタジアム学園祭」で開催）

○内容：①商品販売
ジョージアワインを使用したロールケーキやネパール餃子の「モモ」など

②イベント
缶バッチ作り体験、写真立て作り体験、バルーンアート、ＶＲ体験

(2) 第２回徳商デパート

○日時：10月26日（土）

○場所：SOGO２階アミコドーム周辺

○内容：①商品販売（第１回と同様）

②イベント
はじめてのおしごと、ボッチャ体験、VR体験など

③ステージ
徳島商業高校生による歌、吹奏楽部や阿波踊り部のパフォーマンス









テーマⅣ





6 成果

○多くの県民に徳島県がホストタウンとなっている国のことを知ってもらうことができた。（第 1 回で推定参加者 5,000 名、第 2 回で推定参加者 4,000 名）
○ボッチャなどパラリンピック競技について県民に知らせると共に高校生自身も知ることができた。
○ホストタウンについての生徒の認知度は、学習前 50%程度であったがイベント後は 100%になった。
○東京 2020 大会に対して応援する機運醸成ができた。（イベント実施後 95%がなんらかの形で係わりたいとの回答があった。）

7 実践において工夫した点（特色）

高校生が主体的に、運営を担っている点。第 3 学年に本部チーム（大学の学祭実行委員会的なチーム）を設置し、第 2 学年の参加チームを含めイベント全体の牽引役としてタイムコントロールした。また、7 月にはプレゼンテーション大会を実施し、企業やマスコミの前で商品について説明することで、緊張感と責任、自覚などが芽生えた。

8 課題等

今回は、自転車置き場の確保などで手間取った。細かい部分までしっかりと確認しながら準備する必要がある。また、企業との連携打ち合わせがギリギリになった班が見られた。本部も担当者により対応差があるため、教員がしっかりとチェックする必要がある。

MEMO

実践事例５　大分県立別府支援学校（大分県）

① 実践のテーマ

留学生との交流学習を通した異文化理解

② 対象者

高等部　全生徒　46 名

③ 展開の形式

【学校における活動】
　その他：総合的な学習の時間

④ 目標（ねらい）

○地域の大学で学ぶ留学生と交流し、異文化理解を深める。
○東京 2020 大会への関心を高める。

⑤ 取組内容

【事前学習】
　○ I’ mPOSSIBLE を活用した独自のプレゼンテーション、クイズの実施
　○パラリンピック競技種目体験（ゴールボール）
　○留学生の出身国を調べ、交流会での質問や内容を検討

【留学生との交流】
　○３カ国の留学生（ベトナム、モンゴル、メキシコ）が自国のオリンピック・パラリンピック選手や文化を紹介
　○各国ごとにグループに分かれ、質問や交流







日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成

【事後学習】
〇交流会の振り返り
〇各学年に分かれ、東京オリンピック・パラリンピック競技ガイドを活用した調べ学習を行い、発表

6 成果

〇経験することが難しい異国文化を知り、理解する学習が実施できたこと。
〇スポーツに対する多様な考え方や、取り組み等の多様性に触れられたこと。

7 実践において工夫した点（特色）

地域の大学生をボランティアとして招いたことで、スムーズに企画・運営を行ったこと。

8 課題等

事前打ち合わせが英語中心となるため、内容の十分な確認が必要である。

実践事例６　札幌市立幌西小学校（札幌市）

1 実践のテーマ

多様な教科と関連付けた国際的なスポーツ大会についての学習

2 対象者

第４学年　169 名

3 展開の形式

【学校における活動】
教科名：国語、道徳、体育、音楽等
その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

○オリンピックなどのスポーツ大会について学んだことが、国際理解や国際協力に役に立つことを理解している。
○札幌オリンピックや東京オリンピックについて必要な情報を取捨選択したり、複数の情報を比較したり関係付けたりしながら解決に向けて考えている。
○活動を通して、2030 年札幌オリンピックの招致について主体的に考えようとしている。

5 取組内容

○ 2019 年ラグビーワールドカップ日本大会についての学習
（ラグビートップリーグ審判員および大会通訳兼輸送ボランティアからの解説）
○ 1972 年札幌冬季オリンピックについての学習
（大会当時についての調べ学習ならびに小笠原歩選手の講演）
○ 2020 年東京オリンピックについての学習（話し合い活動）
○ 2030 年札幌冬季オリンピックについての学習
（札幌市職員による札幌市の招致活動の概要説明と招致についての児童の意見発信）



日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成

6 成果

○子どもがオリンピック・パラリンピックについて関心を強くもち、自分の街でもぜひ開催したいという思いになった。
○国際理解という面では、外国人への一人一人の関わりが大切であることに気付き、おもてなしの精神や日本の文化の発信が大事であることを理解した。

7 実践において工夫した点（特色）

○国語や道徳、体育、音楽など、他教科とも関連付けて、体験活動を存分に入れた形で学習を展開した。
○「人」を教材化することに重点を置き、様々なゲストティーチャーから学ぶ機会を作った。
○今日的な課題に重点を置いて授業を構成したので、新聞や広報誌など、身近な資料から学習を展開した。

8 課題等

○今回は、今日的な課題という部分に重点を置いた実践になったため、次年度以降も継続的に行うためには、更なる工夫が必要になる。
○札幌市では、第３学年で実践するために副読本を作成しているため、第３学年での実践が最も展開しやすいと感じた。

実践事例７　静岡市立梅ケ島小中学校（静岡市）

① 実践のテーマ

食の学習を通じた異文化・自文化理解

② 対象者

小学部：第５学年　３名、第６学年　１名
中学部：第１学年　４名、第２学年　１名、第３学年　３名

③ 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：家庭

④ 目標（ねらい）

○食を通じた異文化学習を行い、「スペイン」への理解を深め、児童生徒の国際感覚や多様性を養う。
○地元食材を使用することで、郷土を思いやる気持ちを醸成する。

⑤ 取組内容

「食を通した異文化理解×地元再発見～はじめてのスペインご飯～」
　○スペインの家庭料理についての学習と調理実習計画の立案
　　講師：クックパッド株式会社　岡根谷実里氏、静岡市水産漁港課　担当者





　○「梅ケ島ソパ・デ・アホ」の作成
　　講師：クックパッド株式会社　岡根谷実里氏





日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成

6 成果

○食に関して、スペインも日本も同じような知恵（古くなってしまった食材をどう使うか、長く保存できる工夫など）を使って調理していることに気付き、もっと他の国についても調べたいと思うようになった。
○スペイン料理と地元の食材を組み合わせる実習をきっかけに、外国の料理に合う静岡の食材を見つけたいと考えるようになった。
○外国は日本とはまったく違う文化であるというイメージをもっていた生徒が、確かに違う部分はあるが同じ考え方も持っていることに気付き、いろいろな国や文化に触れてみたいと考えるようになった。

7 実践において工夫した点（特色）

○料理レシピサービスを運営する「クックパッド株式会社」と連携し、食を通じた異文化理解を行う。
○作った料理についての感想等を「クックパッド」へ投稿し、広く発信する。
○静岡市の中山間地「オクシズ」地域にある本校が、駿河湾に面した地域「しずまえ」の食材を用いることで、地元再発見の要素を加える。

8 課題等

郷土の文化や世界の多様性について食を通して学ぶとともに、スポーツを通しても学べる機会となればよかった。

実践事例８　神戸市立美賀多台小学校（神戸市）

1 実践のテーマ

ネパールパラリンピック水泳選手団との国際交流

2 対象者

第５学年　57 名

3 展開の形式

【学校における活動】
教科名：国語、外国語
行事名：ネパールの方との交流会～ネパールパラリンピック選手団の皆さんと国際交流しよう～
その他：総合的な学習の時間、道徳

4 目標（ねらい）

○ネパールパラ水泳チームの選手・スタッフとの交流を通じて、ネパールの生活や文化等を学ぶとともに、日本との違いを知ることで、日本の生活や文化等についても学ぶ。
○パラアスリートとの触れ合いを通じて、障がい者に対する理解を深め、困難を乗り越えて夢を実現するために努力することの素晴らしさに気付く。
○互いを尊重する気持ちがあれば、国や言葉、文化の違いを超えたコミュニケーションをとることができることに気付く。

5 取組内容

【事前学習】
○パラリンピック競技、特に水泳競技について学習
○ネパールに関する調べ学習（観光、気候、交通、家、伝統、食べ物、生活、祝日、学校、スポーツ）およびパワーポイント資料の作成
○ネパール国歌の練習
○障がいを持つ選手が交流会で予定しているじゃんけん列車にどのように参加できるか話し合い、言葉（英語）でグー（ストーン）・チョキ（シザー）・パー（ペーパー）を表現することを考えた。
○外国語で学習した単語を取り入れた自己紹介などの練習

【ネパールの方との交流会】
○ネパール国歌の披露・歓迎
○ネパールパラ水泳チームの自己紹介・障がいに関する説明

日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成

○ネパールに関するパワーポイントの発表、質疑
○じゃんけん列車
○児童からネパールパラ水泳チームへ、歌と寄せ書きのプレゼント
○ネパールパラ水泳チームとの交流給食







【事後学習】
○ネパールに関するパワーポイントの発表を授業参観日に行い、保護者にもネパールについて知識や興味を広げていただいた。
○交流を通して心に残ったことをプリントにまとめることで、活動や自己の成長の振り返りを行った。

6 成果

○他国の特色を知ることで、国際理解の意識が高まった。
○水泳のパラリンピック選手と出会うこと、触れ合うこと、伝え合うことを通して、困難を乗り越えて夢に向かう強い心や、思いやりの気持ちが育った。また、笑顔や相手を思う気持ちなど、お互いを理解するための手段は言葉だけではないことに気付くことができた。

7 実践において工夫した点（特色）

オリパラ教育を中心に、福祉教育、人権教育にまで視野を広げ、共生の精神を培えるような内容にしたこと。

8 課題等

○日程がなかなか決まらず、学習計画が定まらなかったこと。
○来日予定が12月から1月末に変わったため、急遽学習予定が変わったこと。また、体育館での交流が大変寒かったこと。
○教育課程に位置付けたいため、単年で終わることのない活動にすること。

実践事例９　北九州市立藤松小学校（北九州市）

1 実践のテーマ

タイ（ホストタウン）の小学校との継続的な交流

2 対象者

全校児童　224 名

3 展開の形式

【学校における活動】
教科名：体育、外国語
行事名：学校行事
その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

○外国の人々の喜ぶことを自主的に計画したり、歓迎したりすることでおもてなしの心を育む。
○外国の人々とスポーツを通して交流することにより、スポーツのよさや楽しさを実感することができるようにする。

5 取組内容

タイのプランサミット小学校との交流の中でドッジボールを行うなどのスポーツを通して、言葉の壁を越えて楽しんでいた。



6 成果

○タイの小学生とスポーツ交流をしたりして、体を動かすことやスポーツの楽しさについて実感することができた。
○実践前に比べて休み時間に外で遊ぶ児童の数が増えた。
○タイの小学生の喜ぶ姿を見ることで、おもてなしの心の大切さやよさを学ぶことができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○藤松小学校伝統の踊りを披露することにより、タイの小学生と文化交流を行えるようにした。
○タイプラサンミットの交流は昨年度から続けているので、昨年度の成果と課題を踏まえ、より実りのある交流になるよう事前に計画を立てた。

8 課題等

○交流相手のことや相手国の文化などを事前に把握して計画する必要がある。
○実施内容を見直し、改善点などを含め次年度に引き継ぐための資料などを作成する。

実践事例１　埼玉県立杉戸高等学校（埼玉県）

1 実践のテーマ

スポーツを通した「関わり方」の学習

2 対象者

全校生徒　941 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：「あり方・生き方教育」
　行事名：トップアスリート講演会

【地域における活動】
　イベント名：ボランティア清掃・小学校との交流事業

4 目標（ねらい）

　東京 2020 大会への関心を深め、スポーツに参加する・観る・支えるという観点から、自ら進んで社会に貢献しようとする力の育成、また自らの生き方を考えさせる機会にしたい。

5 取組内容

○ DVD 視聴（第 1 学年 317 名対象）
　DVD 視聴をしながらメモを取らせ、その後グループで各自の考えや価値観を確認する。
○地域のボランティア清掃（280 名参加）
○近隣小学校（杉戸第二小学校）との交流活動
　空手道部：第 5.6 学年と運動会前日準備　サッカー部：朝マラソンの並走、練習の補助
　バスケットボール部：授業補助





○トップアスリート講演会　講師：川内優輝氏（全校生徒対象）





6 成果

○オリンピック・パラリンピックへの関わりについては、学校活動のなかで動機づけをし、一生に一度の経験かもしれない国を挙げてのイベントに、関心を持たせるように心がけた。
○スポーツに「参加する・観る・支える」という観点から、スポーツで得られる感動や、生きがいとしてのとらえ方、スポーツを通じての健康の保持増進など、生徒それぞれに実感させることができた。
○「あり方・生き方教育」と結び付けたことで、スポーツは参加（PLAY）するだけでなく、様々な関わり方を通して人と人とがつながり、豊かな生き方へとつながることに気づかせることができた。
○年間を通してこれらの働きかけを行った結果、挨拶や返事、掃除をしっかり行うなど、自ら考え、前向きに行動できる生徒が増えた。

7 実践において工夫した点（特色）

○昨年度は、ハイパフォーマンススポーツセンター長の勝田隆氏の講演会を行い、競技者を支える立場や実際に同行したオリンピックでの現状をお話しいただいた。
○今回の川内氏のトップアスリート講演会は、競技者の立場からの視点や、支えられる立場での目線とその環境への思いなどを生徒に伝えたいと企画した。
○川内氏の講演会までに、様々な活動を通じてスポーツに参加し、周囲の支えに感謝できるような人づくりを心がけながら講演会につなげた。

8 課題等

○この事業は体育的活動と結び付けるだけでなく、様々な教科でも取り扱うことが可能であり、実施する必要性を感じた。
○学校の行事と各教科での取り扱いをバランスよく調整し、実践していくことが大切であると感じた。

三条市立西鱒田小学校（新潟県）

1 実践のテーマ

一緒にスポーツを楽しもう

2 対象者

第６学年　30 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：オリンピック・パラリンピック講演会
　その他：道徳、総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

　オリンピック・パラリンピック教育の推進によって、スポーツの楽しさや価値の理解、スポーツを通した心の交流の素晴らしさへの気付き、共生社会に向けた心のバリアフリーへの理解等、多様な学びを得ることで、豊かな人間性を育む機会とする。

5 取組内容

【総合的な学習の時間】
　本校では、地域の特別支援学校と第５・６学年が２か年計画で交流学習を行っており、今年度は、「一緒にスポーツを楽しもう」というテーマで学習を進めた。
　〇パラリンピックスポーツを調べ、障がいの種類によって様々な工夫がなされていることを学ぶ。
　〇パラリンピックスポーツの工夫を「道具の工夫」「ルールの工夫」「人的サポート」の３観点に分類し、自分たちが企画する競技では、どのような工夫をしていけば一緒に楽しむことができるか、様々な工夫を考える。
　〇「障がい」という概念について学習する。





スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

○県教育委員会よりボッチャセットを借用し、体験を行う。
○義肢装具士の臼井二美男氏を取り上げ、臼井氏が主催する「ヘルスエンジェル」についても学ぶ。

【オリンピック・パラリンピック講演会】
講師：臼井二美男氏（義肢装具士）、中村国一氏（パラ陸上アスリート）、須川まきこ氏（イラストレーター）





6 成果

○学習を通して、「障がい」という概念が変わったと答えている児童が多かったこと。
○ボッチャ体験を通して、ボッチャの魅力である「誰でもできる」を感じる児童が多かったこと。
○交流学習では、自分たちが考えた様々な工夫により一緒にスポーツをすることができ、児童が充実感を得られたこと。
○人に幸せを与えることができる仕事に魅力を感じ、「人の役に立つ」という視点で考えることができる重要な価値観を得られたこと。

7 実践において工夫した点（特色）

○特別支援学校との連携により、効果的な学習成果を得られたこと。
○県教育委員会が貸し出しているボッチャセットを活用し、パラリンピック種目への興味関心を引き上げたこと。
○三条市は「ものづくり」を職業としている家庭も多く、「作ったものが人の役に立つ」という仕事の価値に対する概念形成を行ったこと。

8 課題等

児童の「障がい」に対する理解は、身体障がいなどの「見える障がい」については理解しやすいものの、「見えない障がい」については理解がしにくい。そのため、「見えない障がい」について理解が進められるような授業を考え、進めていく必要がある。

実践事例３　小山町立須走小学校（静岡県）

1 実践のテーマ

年間を通じたオリパラ大会についての学習

2 対象者

第４学年　36 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

○オリンピック･パラリンピックに関心を持ち、個人課題を追究することができる。また、調べたことをまとめたり、発信したりすることができる。
○興味をもった種目について体験し、それを積極的に広めることができる。

5 取組内容

【1 学期　オリンピック（パラリンピック）について調べよう】
　○興味のあるオリンピック（パラリンピック）種目について調べ、新聞にまとめる。
　○パラサイクリング体験会（町のイベント）に参加する。
　○体験や調べたことをクイズにして、全校に投げ掛ける。




【2 学期　パラリンピックについて調べよう】
　○パラリンピックの種目等について調べる。
　○パラリンピック種目にチャレンジしてみよう（ボッチャ体験）。
　○ボッチャのボールを作ってみよう。
　○ペアの２年生に教えよう。





【3 学期　みんなに広げよう】
〇おうちの人に教えよう。
〇全校のみんなに体験してもらおう。




6 成果

〇インターネットや書籍だけでなく、実際に体験をしたり発信したりすることで、子どもたちの興味が広がり、障がい者スポーツへの関心が深まった。実践力や思考力も付いてきた。
〇自分で調べたこと、体験したことをみんなに知ってもらおうと意欲が高まった。
〇今までスポーツにあまり関心がなかった子どもたちも、テレビのニュース等でパラスポーツが紹介されているのを目にして、家族や友達にも広めるようになった。

7 実践において工夫した点（特色）

〇オリンピック・パラリンピックについて、年間を通して子どもたちが学び続ける仕掛けをした（体験等）。
〇学校にある用具を活用して、体験活動を行った。
〇学んだことを発信する場を設ける工夫をした。

8 課題等

〇ここまで学んできた第４学年に引き続き学んでほしいという気持ちはあるが、第５学年になると、米作り等違った学習の予定があるため難しい。
〇学校では学習する時間に限りがある。これを自主勉強につなげていくと、さらに学びが深まると思う。また、調べた物を上手に掲示していくことで、意欲につながっていくのではと考える。
〇タブレットが有効に使えるようになると、パラリンピックの動画等も見ることができる。早急にタブレット使用ができるようにしたい。

実践事例４　一宮市立尾西第二中学校（愛知県）

1 実践のテーマ

スポーツをサポートする側に着目した講演会

2 対象者

全校生徒　322 名

3 展開の形式

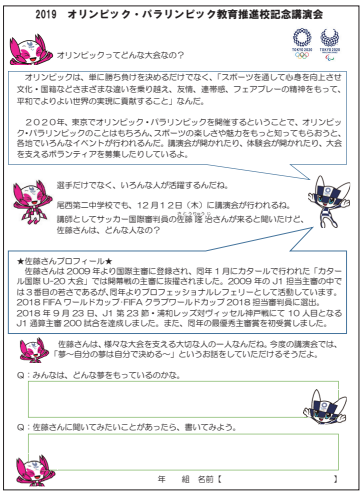
【学校における活動】
　行事名：講演会
　その他：道徳、学級活動

4 目標（ねらい）

○オリンピックの精神を知る。
○サッカー国際審判員である佐藤隆治氏の講演を通して、夢をあきらめず自分の可能性を信じて努力することの大切さや、生涯にわたってスポーツを楽しむ心をはぐくむ。

5 取組内容

【事前指導】
（1）オリンピックの精神に触れる（学級活動）
　オリンピックの精神「スポーツを通して心身を向上させ文化・国籍などさまざまな違いを乗り越え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって、平和でよりよい世界の実現に貢献すること」（東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織員会 HP より）を知ることで、オリンピック・パラリンピックの意義をとらえる。
（2）自分の夢について考える（道徳）
　自分の将来や夢について考える。


2019　オリンピック・パラリンピック教育推進校記念講演会

オリンピックってどんな大会なの？

オリンピックは、単に勝ち負けを決めるだけでなく、「スポーツを通じて心身を向上させ文化・国籍などさまざまな違いを乗り越え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって、平和でよりよい世界の実現に貢献すること」なんだ。

２０２０年、東京でオリンピック・パラリンピックを開催するということで、オリンピック・パラリンピックのことはもちろん、スポーツの楽しさや魅力をもっと知ってもらおうと、各地でいろんなイベントが行われるんだ。講演会が開かれたり、体験会が開かれたり、大会を支えるボランティアを募集したりしているよ。

選手だけでなく、いろんな人が活躍するんだね。

尾西第二中学校でも、12月12日（木）に講演会が行われるね。
講師としてサッカー国際審判員の佐藤 隆治さんが来ると聞いたけど、佐藤さんは、どんな人なの？

★佐藤さんプロフィール★
佐藤さんは 2009 年より国際主審に登録され、同年 1 月にカタールで行われた「カタール国際 U-20 大会」では開幕戦の主審に抜擢されました。2009 年の J1 担当主審のデビューは３番目の若さですが、同年よりプロフェッショナルレフェリーとして活動しています。2018 FIFA ワールドカップ・FIFA クラブワールドカップ 2018 担当審判員に選出。2018 年 9 月 23 日、J1 第 23 節・浦和レッズ対ヴィッセル神戸戦にて 10 人目となる J1 通算主審 200 試合を達成しました。また、同年の最優秀主審賞を初受賞しました。

佐藤さんは、様々な大会を支える大切な人の一人なんだね。今度の講演会では、「夢～自分の夢は自分で決める～」というお話をしていただけるそうだよ。

Q：みんなは、どんな夢をもっているのかな。

Q：佐藤さんに聞いてみたいことがあったら、書いてみよう。

年　組　名前【　　】



【佐藤隆治氏（愛知県一宮市出身）の講演】
　サッカー国際審判員である佐藤隆治氏の講演を通して、以下の心をはぐくむきっかけとする。
○夢をあきらめない心
○自分の可能性を信じる心
○フェアプレー、公正公平の精神
○生涯にわたってスポーツを楽しむ

スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

6 成果

【事前学習】

○オリンピック・パラリンピックには、さまざまな思いが込められた大会であることに気付くことができた。

○講演会前に、改めて自分の夢や将来について考えることができた。

【講演会（生徒の感想より）】

○選手だけでなく、審判などいろいろな立場の人が存在することによって、試合が成り立つことに気付くことができた。

○スポーツそのものにあまり興味がなかったが、サッカーやオリンピック・パラリンピックに興味をもつようになった。

○オリンピック・パラリンピックを見てみたくなった。

○夢や夢をかなえるための努力の大切さを学んだ。

○自分の道は自分自身で決めなくてはならない。「自分磨き」を続けることが大切だと学んだ。

○スポーツは国境や言葉の壁を越えて、いろんな人とつながれることを学んだ。私もいろいろチャレンジしたい。

7 実践において工夫した点（特色）

○一宮市出身で世界の第一線で活躍する人がいることを知ることで、親しみを覚えるとともに、誇りを持たせることができた。

○選手ではなく、審判員として活躍する佐藤隆治氏の話を聞くことで、スポーツは競技者だけでなく、様々な人々のサポートによって成り立つことに気付かせることができた。

○世界で活躍する佐藤隆治氏の姿を見て、スポーツを通して世界の人々とつながることができると感じさせることができた。

8 課題等

○講演会を中心とした活動であったので、体験的な活動を入れるとさらに興味が広がったと思う。

○今後も興味・関心が継続していくように、オリンピック・パラリンピックに関する学習を、各教科で取り組めるとよかった。

実践事例５　京都府立南丹高等学校（京都府）

1 実践のテーマ

「スポーツ×環境」に焦点をあてたスポ GOMI 活動

2 対象者

第３学年　スポーツ科学分野課題研究生徒　32 名

3 展開の形式

【学校における活動】
その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

「スポーツ×環境」に焦点をあてたスポ GOMI について知る。

5 取組内容

日時：11 月 14 日（木）
内容：河川ごみに詳しい原田禎夫大阪商業大学准教授を招いて、本校第３学年スポーツ科学分野の生徒に対し、スポーツの要素を取り入れながらごみ拾いをする「スポーツ×環境」に焦点をあてたスポ GOMI について、実際に活動しながら指導をいただいた。具体的には、学校の近くを流れる大堰川（保津川）の河原でゴミを拾った。
※「スポ GOMI」ルールは、現場の実情にあわせて自分たちで考えた。たとえば事前に落ちているものの種類を見て、空き缶１点、ビニール袋２点…として得点を競ったり、ごみの総重量で競ったりなどが考えられる。









6 成果

「スポ GOMI」では単なるボランティア活動でなく、スポーツの競技のように楽しみながらゴミ拾いを行うという観点を知った。

7 実践において工夫した点（特色）

○ゴミ拾いについては、危険がないよう事前に河原の状況を確かめ、ガラスや金属でケガをしないよう注意した。
○「スポ GOMI」で集めたゴミ処理に関しては、NPO 法人プロジェクト保津川の協力を得て南丹土木事務所企画調整室に依頼した。

8 課題等

生徒はごみ拾いをスポーツとして楽しんで活動していたが、ごみの量が予想以上に多く、また大型のごみ、たとえばタイヤや布団のようなものもあって、ごみ集めを競うには少し難しいところがあった。事前にゴミを拾う場所の状況をよく見て、拾う場所の範囲を決めたり、ごみの種類の制限を行う等のルール設定を検討する必要がある。

実践事例６　鳥取県立皆生養護学校（鳥取県）

1 実践のテーマ

スポーツへの興味・関心の向上を意図したボッチャ体験

2 対象者

全校幼児児童生徒　63 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：体育（ボッチャを活用した継続的な取組）
　イベント名：居住地校交流、学部交流

4 目標（ねらい）

○パラ競技を知る・体験する活動を通してスポーツへの興味・関心の向上を図る。
○幼児児童生徒が生涯にわたり障がいの状態に応じてスポーツをすることができる体制整備を図る。

5 取組内容

○各学部の体育でボッチャを取り入れた学習を実施
　小学部　単一・Ⅰ型グループ　８回
　中学部　単一・Ⅰ型グループ　５回　Ⅱ型グループ　５回
　高等部　単一グループ　15 回　　Ⅰ型グループ　20 回

○小学部、中学部の居住地校交流、学部交流でボッチャを通した交流及び共同学習を実施
　小学部　居住地交流１校（3 回）
　中学部　居住地交流１校（2 回）　分校との学部交流（1 回）

○教員向けの体験会を実施
　幼・小学部ボッチャ体験会（1 月）

○「ボッチャで全国を目指そう！」
　鳥取県ボッチャ協会と連携して月曜日の放課後にボッチャができる体制を整備。
　月曜日の放課後は卒業生も参加できる取組として位置づけ。

6 成果

○腕を振る強さを調整して的玉に近づける投球技能を身につけたり、相手に玉を入れさせない（相手チームとのかけひきの中で）玉の位置取りを思考・判断したりすることができるようになった。
○肢体不自由児にとって困難さが大きい空間の知覚や距離・方向の概念形成といった自立活動の視点からも有効であった。特に腕を動かすことが困難な児童生徒がランプ（投球用の道具）を使って的玉に一番近い位置にボールを運んで勝利に貢献する場面が何度もあり、自己肯定感や有用感の涵養にも効果があると感じた。学習後の児童生徒の感想には、ボッチャの楽しさを感じたり、上達するためにはどうするか考えたりしている内容が書かれていた。更に競技力を上げるために競技者を増やすことを考えるなどより主体的な姿が見られるようになった。
○ボッチャは障がいの有無や程度に関わらず、同じルールの基で競うことができ、交流及び共同学習においても児童生徒が積極的に取り組み、交流中は盛り上がる場面が多くあった。
○複数回実施した学校では、回数を重ねるごとにお互いの良さを理解し、協力してゲームをする姿が見られるようになった。
○週１回放課後に鳥取県ボッチャ協会と連携した取組を行い継続的に取り組む場を設けることで、意識を高く持つ生徒がでてきており、全国大会出場を経て更に自己を向上させようとする姿が見られるようになった。

7 実践において工夫した点（特色）

○パラリンピック競技の中でも、ボッチャを中心に据えて事業を展開した。ボッチャは児童生徒の肢体不自由の状態に応じて取り組むことができる種目であり、競技の面白さを体感しやすい。また、児童生徒の身体的・認知的発達につながる多くの良さをもつ教材といえる。
○事前に図書館等でパラリンピック競技を調べ、活動の前から期待していた相手校の児童生徒もいた。
○協会と連携することで専門性の高い指導者に関わってもらうことができ、競技力の向上が図られている。それにより、全日本選抜の候補に選出される生徒も出ている。また、ボッチャ以外に車いすバスケットボールの体験も行うなど、パラリンピック競技に触れる機会を持つことにも取り組んだ。

8 課題等

特になし。

実践事例７　萩市立大島小中学校（山口県）

1 実践のテーマ

アスリートの健康管理方法の調査及び発表

2 対象者

全校児童生徒　45 名（小学生 26 名、中学生 19 名）
保護者　30 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　その他：保健体育委員会の活動

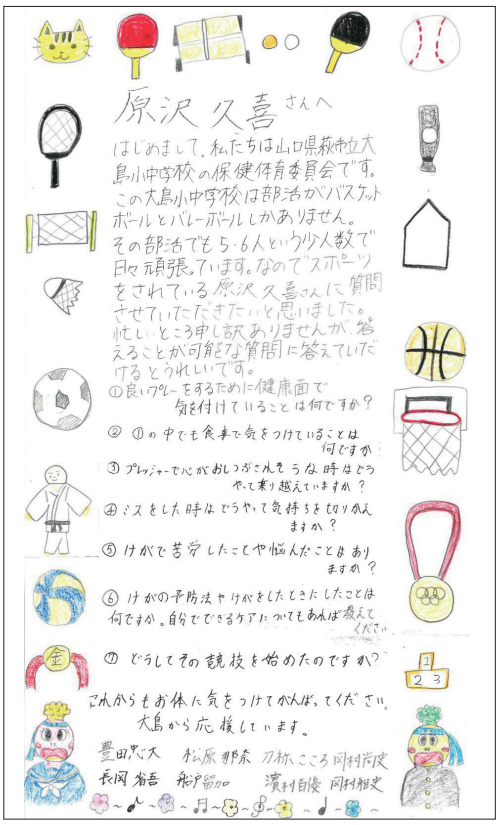
4 目標（ねらい）

　オリンピック・パラリンピックをめざすトップアスリートとの関わりを通して、児童生徒が自身の健康管理やけがの防止、体力向上に対する意識を高め、自らの生き方についてより深く考えることができるようになる。

5 取組内容

（1）アスリートにアンケート調査を実施する。

　離島では救急搬送ができず、自分自身で健康管理をする必要性が高いことから、保健体育委員会の活動として、アスリートの健康管理方法について調査することにした。調査方法として、山口県出身のアスリートを中心に手紙による質問調査を行った。児童生徒は、世界で活躍したり、自身が取り組んでいるスポーツで活躍したりしている選手と直接やりとりができるということに強く興味をもち、意欲的に取り組んだ。





スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

テーマⅤ

(2) 調査結果をポスターにまとめて文化祭で展示する。

山口県下関市出身でリオ五輪柔道100kg超級銀メダリスト原沢久喜選手のほか、バスケットボールWリーグやサッカーＪリーグで活躍する選手、計5名から回答をいただき、その内容をまとめたポスターを作成した。作成したポスターは文化祭で特別ブースを設けて展示し、全校児童生徒や保護者、地域の方々の健康管理に対する意識の向上を図った。



6 成果

○東京2020大会を迎えるにあたり、複数のアスリートと直接話したり、手紙のやりとりをしたりしたことにより、彼らの活躍する姿を身近に感じる事ができ、児童生徒の健康、体力の自己管理に対する意識が高まった。

○児童生徒の感想より（一部抜粋）

「正しいフォームが怪我の予防につながることを知り、自分に合ったフォームや動き方で、怪我のない健康な体づくりをしていきたいと思いました。」

「アスリートの方々の基本的なルーティーンや、ストレッチ方法、交代浴などの健康法を知ることができたので、自分の生活で試してみたいです。」

「アスリートの人でも小まめにストレッチやクールダウンを行って自分の体を管理していることを知ったので、私も部活が始まる前にしっかりストレッチをして、家に帰ったらクールダウンをしていきたいと思います。」

「アスリートの方々の色々な食事方法や睡眠時間を知ることができたので、自分も試してみたいです。」

7 実践において工夫した点（特色）

今年度は、昨年度のテーマ（スポーツを通じたインクルーシブな社会の構築）とは異なるテーマ（健康の自己管理）で取り組んだことで、児童生徒や保護者の本事業に対する関心をさらに高めることができた。

8 課題等

今後もこの事業を継続する･しないに関わらず、児童生徒の健康管理については、本人のみならず保護者等の意識を高めなければならない。

また、本事業の成果をより高めるためには、昨年度や今年度の取組によって築いてきた、アスリートと学校、担当する教育委員会等とのネットワークをさらに広げることが大切である。

さらに、来年度以降も、引き続き、事後学習に力を入れることが求められる。

実践事例８　高松市立木太南小学校（香川県）

1 実践のテーマ

オリパラ大会のテーマ曲を活用した音楽の授業

2 対象者

第６学年　111 名（3 クラス）

3 展開の形式

【学校における活動】
教科名：国語、音楽
行事名：南っ子フェスタ
その他：総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

○オリパラ学習を通して、児童のオリンピック・パラリンピックへの関心や知識を高め、様々な競技を応援したり学んだことを発信したりするなど、色々な形でオリパラに関わるようにする。
○パラリンピックを通して、児童の障がいのある人への理解を深めたり、障がい者と健常者との共生について考えたりできるようにする。

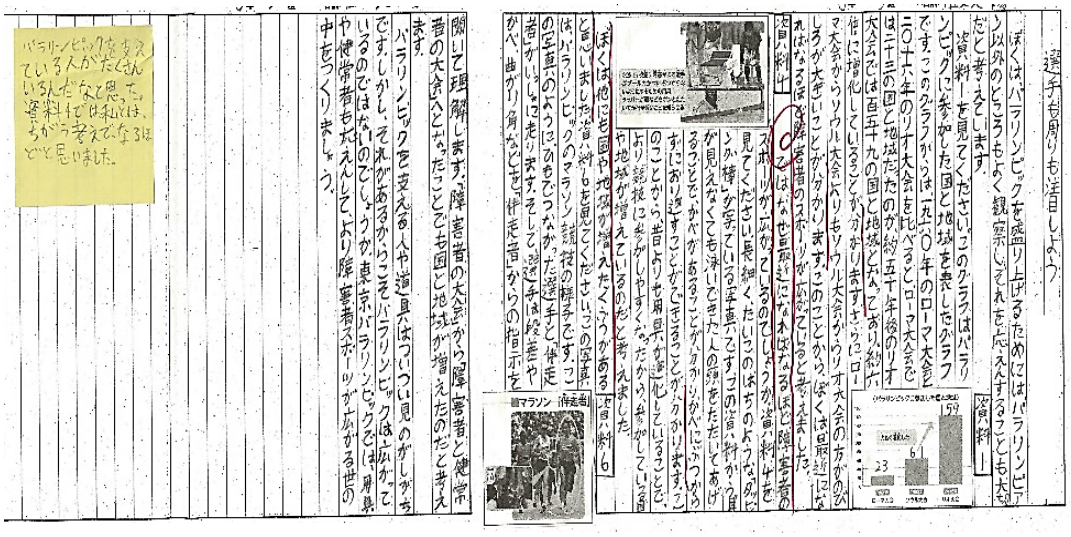
5 取組内容

○車いすバスケットボール体験・講演
○シッティングバレーボール体験





○本校を紹介する新聞づくりの記事の１つにオリパラの活動（主に車いすバスケットボール）に関する取り組みを選択し、「木太南っ子新聞」を作成した。
○国語「資料を生かして呼びかけよう」の単元で I’mPOSSIBLE を活用してパラリンピックの魅力を紹介した。



○本校の学習発表会である南っ子フェスタで、2014 年ソチオリンピック・パラリンピックの NHK のテーマ曲「今、咲き誇る花たちよ」を合奏し、2018 年平昌オリンピック・パラリンピックの応援歌「うたエール」を合唱した。曲の間や終わりに、第 6 学年が行っているオリパラ学習の活動について少し紹介した。





○読書センターにオリパラコーナーを設置した。

6 成果

○オリンピック・パラリンピックへの興味や関心が高まり、知識が深まった。
○選手以外にもオリンピック・パラリンピックに関わっている人が多くいることを知り、自分も直接サポートしたいと感じる児童や応援することや情報発信することなど、間接的でもオリンピック・パラリンピックに関わりたいと思う児童が増えた。
○パラリンピアンの前向きな生き方を知って障がいのある人への理解が深まり、これから障がい者も健常者も助け合いながら、幸せな世の中にしていきたいという気持ちが高まった。
○障がいのある人へのイメージが大きく変わり、「できないことよりできることに熱心に取り組んでいる姿」を知り、どんな時でも前向きに生きる大切さに気付くことができた。
○体験を通して、オリンピアンの偉大さに気付くことができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○県内唯一の車いすバスケットボールチーム（WBC）を呼んで、体験・交流できたこと。また、できるだけ多くの児童が体験できるように、クラスごとに体験会を実施し、体験会の後第６学年全体で講演を聞くなど、限られた時間の中でタイムスケジュールを考えて取り組んだ。
○学習発表会や参観、新聞やTVなどのメディアなどを通して、多くの人たちに自分たちの取り組みを発信できた。

8 課題等

○車いすバスケットボール体験を行うときは、全校児童で見学したり講演を聞いたりする機会を作り、できるだけ多くの学年で学びを深める。
○どの教科のどの単元にオリパラ学習を関連づけたり位置づけをはっきりさせる。

MEMO

実践事例９　西条市立ひまわり幼稚園（愛媛県）

1 実践のテーマ

クライミング教室を活用した東京 2020 大会の新競技体験

2 対象者

園児　42 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：講師招聘

4 目標（ねらい）

○オリンピック･パラリンピックに興味をもたせ、クライミング選手の講話･実演･実技指導を通してスポーツに対する興味・関心を高める。
○日常の教育活動の中で、地域のスポーツ施設を活用するとともに、園内で積極的にスポーツに取り組めるような環境を整備することにより、園児にスポーツを楽しむ心を育成する。

5 取組内容

【事前指導】
「オリンピック・パラリンピックについて知ろう」
　○オリンピック・パラリンピックの歴史、種目、開催地等
　○園だよりによる保護者への啓発

【講師招聘】
　日時：11 月 6 日（水）　午前中
　内容：石鎚クライミングパーク SAIJO の見学・体験
　　実演、講話、園児の実技体験指導、保護者への案内
　講師：西条市こども健康部スポーツ健康課主事　松本雄太郎氏
　　（愛媛県スポーツクライミング競技委員長、国体・日本選手権出場経験あり、現役の競技者）






6 成果

○オリンピック･パラリンピックについて概要（歴史、種目、参加国、キャラクター等）を知ることができた。
○現役選手の講話・実演・実技指導により、「ホンモノ」に触れることができた。実演では、その「凄さ」を実感することができた。また、実技指導では、自分もやってみようという意欲を高めることができた。
○園の近くにある石鎚クライミングパーク SAIJO（国体で使用した施設）の見学･体験を通して、地域の施設を利用しながら進んでスポーツを楽しんでいこうという意識を高めることができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○現役選手の講話では、園児に分かりやすい言葉・表現を用いていただくようお願いした。また、園児一人一人が実技指導を受けられるよう、各クラス順に時間を確保して実施した。
○オリパラ教育の状況を園だよりで保護者に発信した。

8 課題等

○園児の興味・関心を持続させていくためには、いろいろな行事や取組内容を工夫し、計画的・意図的・継続的に実施することが大切である。
○オリパラ教育を継続して実施していくには、園だけでの実践には限界がある。他校種との交流、行政の支援（選手の招聘、施設利用料の減免等）も必要である。

実践事例 10　宿毛市立咸陽小学校（高知県）

1 実践のテーマ

目的に応じたゲストティーチャーの活用

2 対象者

全学年　196 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：体育
　その他：特別活動、総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

「自分が好き　友だちが好き　故郷（ここ）が好き」というキャリア教育のねらいのもと、各学年で地域のすばらしさを発見する活動を系統的に取り入れ、自尊感情や自己有用感を高めると共に地域を愛し誇れる児童の育成をめざす。このような取組とオリンピック・パラリンピック教育を関連させることで、ボランティア意識やおもてなしの心を育て、障がい者理解、国際感覚やスポーツの楽しさなどを理解し、積極的にオリンピック・パラリンピックに関わろうとする児童の育成をめざす。

5 取組内容

【スポーツの楽しさプロジェクト】
　〇出前水泳指導
　　地域で水泳教室をしている指導者を講師として招聘し、全学年で計 15 時間、水泳の実技指導を受けた。



○出前縄跳び指導

高知市からスポーツインストラクターの方を講師として招聘し、第１学年児童が授業を受けた。授業を行った翌日から校庭で縄跳びをする様子が多く見られた。



○出前空手指導

元保護者で、地域で空手を指導している方を講師として招聘し、第２学年児童において空手教室を行った。東京2020大会から正式種目となり、空手というスポーツに触れるよい機会となった。児童の中には道場で習っている子もおり、積極的に学ぶことができた。



○出前陸上指導

地域で子どもたちに陸上を指導している方を講師として招聘し、第３学年児童が授業を受けた。体ほぐしの運動や走り方のフォーム、走り幅跳びの跳び方など、基礎的な運動を教えてもらい、陸上種目の興味･関心を高めることができた。



6 成果

今年度は、地域のスポーツ指導者を招いて、子どもたちにスポーツの楽しさや魅力について実技指導を交えながら教えてもらうことができた。子どもたちは、普段経験したことのないスポーツに触れる機会が持て、更に東京2020大会への興味・関心が高まったようである。

7 実践において工夫した点（特色）

普段の授業（総合的な学習の時間・特別活動）が、オリパラ教育とどのように関連を図れているか、カリキュラムマネジメントを行ったこと。

8 課題等

○年度当初に計画を立てたが、他の事業や教科との関連で十分な時間の確保ができなかったこと。

○カリキュラムマネジメントをしっかり行い、オリパラ教育の内容と道徳や他の教科の単元との関連を図ること。

実践事例 11　小竹町立小竹中学校（福岡県）

1 実践のテーマ

理科における金・銀メダルの素材を作る実験

2 対象者

第 2 学年　46 名

3 展開の形式

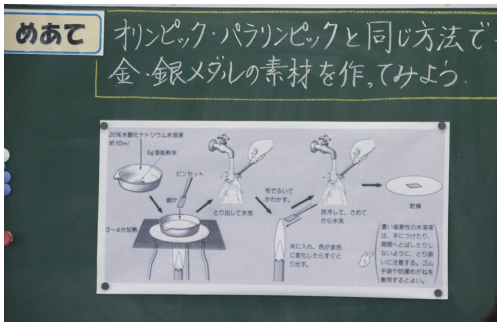
【学校における活動】
　教科名：理科

4 目標（ねらい）

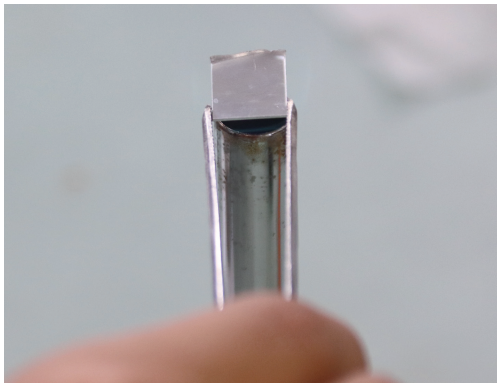
　オリンピック・パラリンピックを題材にした道徳や金メダル・銀メダルの素材を銅から作るという理科の授業を通して、スポーツに対する興味・関心の向上を図る。

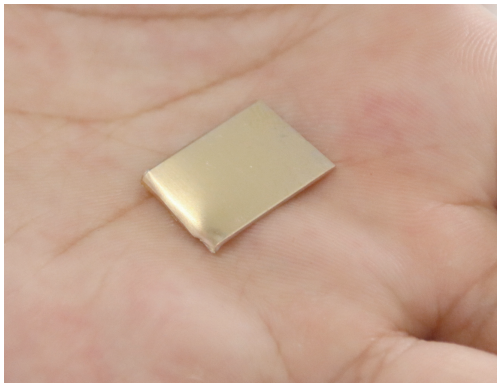
5 取組内容

「オリンピック・パラリンピックと同じ方法で金・銀メダルの素材を作ってみよう」
　内容：銅板→銀色（亜鉛メッキ）→金色（黄銅）になる実験





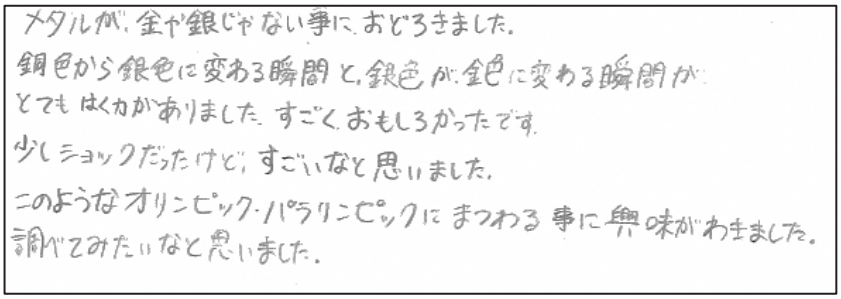


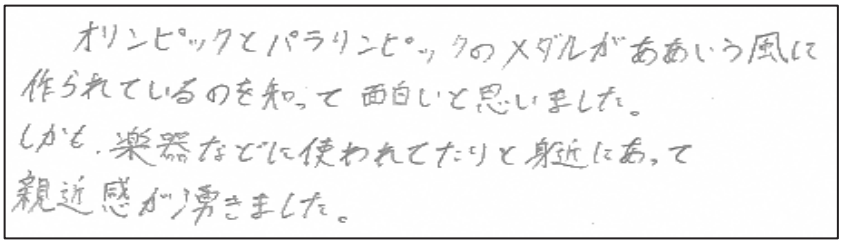


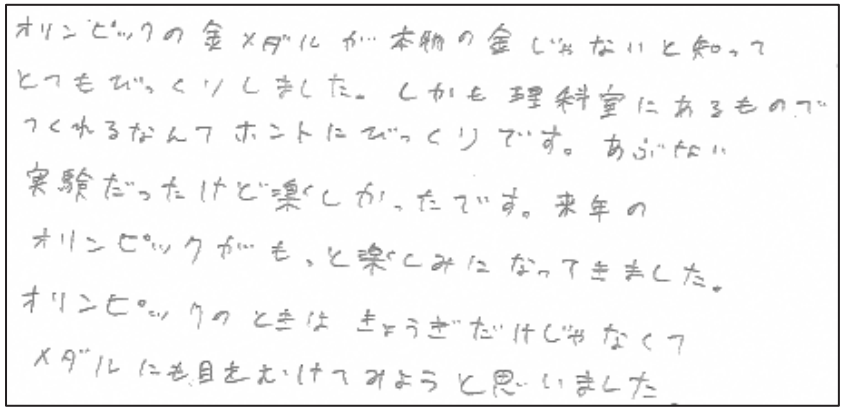
スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

6 成果

○オリパラ教育について、保健体育だけでなく他教科からのアプローチができた。
○オリンピック・パラリンピックに対する興味関心を高めることができた。（生徒の感想より）


メダルが、金や銀じゃない事におどろきました。
銅色から銀色に変わる瞬間と、銀色が金色に変わる瞬間が
とてもはくりがありました。すごくおもしろかったです。
少しショックだったけど、すごいなと思いました。
このようなオリンピック・パラリンピックにまつわる事に興味がわきました。
調べてみたいなと思いました。


オリンピックとパラリンピックのメダルがああいう風に
作られているのを知って面白いと思いました。
しかも、楽器などに使われてたりと身近にあって
親近感が湧きました。


オリンピックの金メダルが本物の金じゃないと知って
とてもびっくりしました。しかも理科室にあるもので
つくれるなんてホントにびっくりです。あぶない
実験だったけど楽しかったです。来年の
オリンピックがもっと楽しみになってきました。
オリンピックのときは きょうぎだけじゃなくて
メダルにも目をむけてみようと思いました。

7 実践において工夫した点（特色）

生徒にとってオリンピック・パラリンピックを身近なものにするために、多方面からのアプローチを試みた。

8 課題等

○教材教具の開発。
○年度途中からの取組であったので、一年間を通した計画が必要。

実践事例１　筑波大学附属小学校

1 実践のテーマ

アートメダルに触れよう～自分なりのアートメダルの構想～

2 対象者

第６学年　62 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　教科名：図画工作

4 目標（ねらい）

○アートメダルに触れ、焼き物で創作する活動条件から様々な可能性を試し、作品を通して自分なりの根拠に基づいた考えを仲間に提案することができる。
○アートメダルのよさを基に発想・構想し、焼き物で創り出すことを通して造形的な見方・考え方を広げることが出来る。
○アートメダルの実物を相互鑑賞し合う中で、互いの想いを繋げ、表現に活かすことができる。互いの作品を評価し合い、感じたよさから更に違う案を模索する。

5 取組内容

日本国民として様々なグローバルな視点を持った将来の姿を見据えた教育が必要と考える。東京オリンピックを間近に控え、学校現場では各教科領域において関連した実践がなされている。取り組みを通して子どもたちにスポーツそのものの魅力や人間の可能性を感じさせ、また平和な国際社会を目指す心身共に豊かな育ちを目指している。図画工作科においては子どもたちの興味関心を元に、メダルを中心として授業を構成した。その歴史、またアートメダルという領域から、その世界的な価値や創造的活動の広がりに触れさせることで、前述したねらいにつなげたいと考えた。実践は四校研において、鑑賞を基にした系統的なカリキュラム作りの試みの一貫である。今年度は第６学年での取組とした。



今回は、日本金属工芸研究所代表取締役である山田敏晶氏を講師に依頼した。山田氏からは、メダルとお金の違いやその価値など、現代のアートメダルにつながる歴史なども含め、子どもたちにお話し頂き、創作意欲につなげさせた。

6 成果

○メダルといえば金メダル銀メダルなどスポーツでの賞、あるいはイベント等の記念の証などのイメージであり、形も当然丸と思っていたのだが、形や色などは勿論、素材も含めて元々は様々な広がりがあることを学ぶことができた。



○創作ではこれまで培った焼き物の技能を生かし、思い思いの意味を込めた（家族に感謝の気持ちを込める、平和や環境などグローバルな課題を取り入れる等）。技術的には、型を生かしたり支えを上手く取り入れたりする等、より抽象的な面白さが見える高学年らしい作品となった。実践は２月末までの報告である。

○担任もメダルに関しては初めての知見を得ることができた。





7 実践において工夫した点（特色）

○山田氏の専門的な立場からの知見、貴重なコレクションを提供いただけた。実際に本物を手に取って身体で感じることで、子どもたちの思い込みを揺さぶることができ、自分なりの表現活動に生かすことができた。

○社長の立場にいる大人が、真剣に生きがいとしてメダルの在り方を啓蒙している姿に、子どもたちも感銘を受けていた。

8 課題等

特になし。

実践事例２　筑波大学附属坂戸高等学校

① 実践のテーマ

附属特別支援学校とのスポーツ交流学習

② 対象者

第２学年　28 名

③ 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：共生社会を目指すスポーツ交流とシンポジウムの集い
　その他：体育科学、介護福祉基礎

④ 目標（ねらい）

【体育科学】
　スポーツの持つ多面的な価値について、同世代の障がいを抱える生徒とのスポーツ創作を通じて理解し、自分との親和性を捉える。

【介護福祉基礎】
　障がいを抱える同世代とのスポーツ交流を通じて、基本的な介助や関わり合いのスキルを向上させ、インクルージョンの価値について自分の考えをもつ。

⑤ 取組内容

(1) 大塚特別支援学校とのサマーキャンプ
　筑波大学の支援を頂き、初回交流を実施。非常に充実したプログラムの中で親睦を深めた。

(2) 大塚特別支援学校とのスポーツ交流 in 坂戸
　考案したスポーツを実施し、それぞれのグループで意見交換を行った。

(3) 桐ヶ丘特別支援学校とのスポーツ交流
　昼食を食べた後に、スポーツ交流を実施、グループごとに改善点などをディスカッションした。





(4) 共生シンポジウムでのスポーツブース運営

附属学校群の児童生徒・保護者総勢100名を超える参加者に12名の生徒が開発スポーツを提供した。



6 成果

○異なる障がいを抱える同世代のアドバイスによって、ユニバーサルスポーツ開発に向けた生徒の学習理解度は飛躍的に向上したことが印象的であった。
○障がいをもつ人から表出される仕草や態度について、見えにくい真意を読み取ろうとする態度が生まれた。
○生徒のキャリア形成に大きな影響を与えた。(社会政策や特別支援教育への進路、地域・行政をまきこんだイベントの自主開催など)

7 実践において工夫した点（特色）

○生徒に委ねる。教師はあくまで伴走者として、客観的に活動を振り返るきっかけと与える役、目標を共有し続けられるサポートに徹する。
○既存の考えや価値観を取り払うための思考学習やスキルトレーニングを、前半に取り入れた。

8 課題等

○物理的な距離や時間などの調整の難しさがある。持続的な授業のありかたにむけ、地元と学校との協働も視野に入れながら継続実施を検討。
○時間割外の活動が多いため、学校内の調整を適切に行う。部活動など、既得権的に課外活動を拘束している学校運営の在り方の抜本的な見直しが必要。スポーツの真の自由化にむけて大人の意識変革・環境整備が重要になる。

実践事例３　筑波大学附属久里浜特別支援学校

1 実践のテーマ

国旗やメダルに親しもう、体を動かすことを楽しもう

2 対象者

幼稚部　17 名、小学部　34 名

3 展開の形式

【学校における活動】
　行事名：運動会

4 目標（ねらい）

　世界の様々な国名や国旗への興味・関心を高め、オリンピックやパラリンピックの競技を観戦するときに、国旗の付いたユニフォームを着用している選手を見たり、応援したりする気持ちを高めるとともに、自分の国や国旗を大切にしたいという気持ちを育む。

5 取組内容

　本校の運動会は、毎年、10 月に実施している。幼稚部の幼児と小学部の児童が一緒に、日々の遊びや体育の授業で学んできたことを、保護者やきょうだい児、祖父母、地域の方々など、多くの人の前で発揮できるように指導を行っている。



　今年度は、万国旗を一新し、世界の国々の国旗を会場全体に張り巡らせ、子供たちが様々な国旗に興味をもつことができるようにした。幼稚部では、運動会に向けた活動の中で、「はじめてのこっきえほん」（ジャパンクリエイティブズ著、てづかあけみイラスト、ハイパーインターナショナル）を子供と一緒に見たり、読んだりすることに取り組んだ。



　また、本校の運動会は、全校の子供が、青、赤、白の３組に分かれ、「玉入れ」や「かけっこ」の結果を基に、互いの点数を競い合っている。それぞれの順位に応じて、メダル授与を行うことができるようにするためである。



1位は金メダル、2位は銀メダル、3位は銅メダルをもらうことができる。今年は、点数や勝敗が子供たちに分かりやすいように、花を得点板に付け、子供たちの目の前で結果を発表した。

閉会式では、メダル価値を感じ、自分たちが表彰されることや勝ったことの喜びや、負けたことの悔しさを味わうことができるように、各組のリーダーへのメダル授与式を実施した。

6 成果

○国旗への興味が高まったこと

幼稚部の子供は、「はじめてのこっきえほん」に出てくる国旗を一つずつ指さし、教師に視線を向けて「これ、なあに？」という思いを伝えた。教師が「日本の旗だね。」や「アメリカの旗だね。ここ赤色だね。」などと語り掛けると、再度、イラストの国旗を見つめ、指先で触っていた。その子供は、運動会当日、自分よりはるかに高い位置に張り巡らしている万国旗の中に、絵本で見た国旗を見付け、ほほ笑みながらその旗を指さし、教師に「あの旗、知ってる」という思いを表現した。

運動会に国旗を飾ることは当たり前のことのようであるが、特に、低年齢段階の子供にとっても様々な国旗に興味をもつきっかけになることが分かった。

○メダルへの興味が高まり、チームへの所属感が育まれたこと

得点発表の場面では、花が貼られている得点板を見て、「やったー。」と歓声を上げたり、「あぁー。」と悔しそうな声を出したりしていた。得点を競い合うことを通して、子供たちはチームへの所属意識を高めたり、勝負することの面白さを感じたりすることができた。様々な競技が行われるオリンピック・パラリンピックでは、各国の選手が所属感をもちながら、競い合う様子を観戦する楽しさにつながっていくと考える。

また、閉会式では、金メダルをもらった子供はうれしそうにポーズをしたり、「やったー。」と声を出したりしていた。一方で、他の組の子供は、その様子をうらやましそうに見つめていた。競い合うことや、表彰式という活動を通して、メダルの意味や価値を実感することができた。

7 実践において工夫した点（特色）

○日々の運動遊びや体育の授業を通して学んだことや新たに獲得した力を、子供たちが、運動会という多くの人の前で発揮することができるように、子供たちの興味・関心に合わせて活動内容を設定したり、様々な学習活動の指導内容を関連させた指導計画を立案し、指導を実施したりした。幼稚部では、子供たちの好きなアニメをテーマにし、子供たちが、そのアニメの展開をイメージし、楽しみながら体を動かすことができるように、アニメで使用されている曲を流したり、器具の配置の仕方を工夫したりした。小学部では、運動会で使用する道具を図画工作で作ったり、運動会の歌を音楽で学習したりするなど、体育の授業と、生活単元学習や図画工作、音楽といった各教科等の授業の指導内容を関連させて指導することで、子供たちの意欲を高め、積極的に活動に取り組むことができるようにした。

○チームへの所属感が高まるように、各組で遊んだり、運動したりする時間を設定した。日ごろ関わりの少ない幼稚部の子供と小学部の子供が、ともにダンスをしたり、玉入れをしたりする活動を実施することで、小学部の子供が幼稚部の子供に手を差し出し、一緒に踊ったり、手をつないで走ったりするなど、関わり合う様子が見られるようになった。

○子供たちが日々の学習で学んだことを発揮できる場を設定した。小学部高学年の子供が、司会を行ったり、全校の前で校歌を演奏したり、選手宣誓をするなど、日ごろの学習の成果を発表できる場を設定した。また、運動会で日々の学習の成果を十分に発揮できるように、段階的に指導の場を広げた。

8 課題等

○運動会を幼稚部と小学部合同で実施しているが、幼稚部の子供にとっては、活動時間が長くなることで、活動に気持ちを向けることが難しいこともある。子供たちがチームとしての所属感をもちながらも、一人一人の実態に合わせた活動時間等を考えていく必要がある。

○今年度は、「かけっこ」と「玉入れ」を得点種目にしていたが、より競い合うことを楽しめるように、得点種目を増やしていくことも検討していく必要がある。

○今年度は、各学年の競技のテーマに合わせた服装を身に付けるなど、子供たちが活動に意欲的に取り組むことができるような工夫をした。次年度以降、さらにチームとしての一体感や競技への意識が高まるように、競技に合わせたユニフォームを子供たちと作成したり、応援合戦をしたりするなど、新たな学習活動に取り組みたい。

MEMO

実践事例掲載校一覧

【幼稚園】

西条市立ひまわり幼稚園（愛媛県）

【小学校】

釧路市立朝陽小学校（北海道）
土浦市立東小学校（茨城県）
香取市立新島小学校（千葉県）
三条市立西鱈田小学校（新潟県）
小山町立須走小学校（静岡県）
鈴鹿市立桜島小学校（三重県）
高松市立木太南小学校（香川県）
宿毛市立咸陽小学校（高知県）
土佐市立新居小学校（高知県）
熊本市立力合西小学校（熊本県）
札幌市立幌西小学校（札幌市）
千葉市立誉田小学校（千葉市）
横浜市立北山田小学校（横浜市）
新潟市立鏡淵小学校（新潟市）
神戸市立美賀多台小学校（神戸市）
北九州市立藤松小学校（北九州市）

【中学校】

二戸市立金田一中学校（岩手県）
福島市立蓬莱中学校（福島県）
つくば市立谷田部東中学校（茨城県）
小松市立安宅中学校（石川県）
北杜市立小淵沢中学校（山梨県）
白馬村立白馬中学校（長野県）
高山市立清見中学校（岐阜県）
一宮市立尾西第二中学校（愛知県）
蟹江町立蟹江中学校（愛知県）
豊岡市立城崎中学校（兵庫県）
赤磐市立磐梨中学校（岡山県）
尾道市立因北中学校（広島県）
小竹町立小竹中学校（福岡県）
福岡県立育徳館中学校（福岡県）
霧島市立国分中学校（鹿児島県）
浜松市立都田中学校（浜松市）

【小中一貫校】

萩市立大島小中学校（山口県）
静岡市立梅ケ島小中学校（静岡市）

【高等学校】

宮城県鹿島台商業高等学校（宮城県）
栃木県立日光明峰高等学校（栃木県）
埼玉県立杉戸高等学校（埼玉県）
滋賀県立国際情報高等学校（滋賀県）
京都府立南丹高等学校（京都府）
岡山県立玉野光南高等学校（岡山県）
徳島県立徳島商業高等学校（徳島県）

【特別支援学校】

福島県立いわき支援学校くぼた校（福島県）
鳥取県立皆生養護学校（鳥取県）
大分県立別府支援学校（大分県）

【筑波大学附属学校群】

筑波大学附属小学校
筑波大学附属坂戸高等学校
筑波大学附属久里浜特別支援学校

令和元年度スポーツ庁委託事業
オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業
実践事例集

令和２年７月発行

編集・発行
筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）
　茨城県つくば市天王台 1-1-1 GSI 棟 204

日本体育大学オリンピック･パラリンピック･ムーブメント全国展開事業（N-COPE）
　東京都世田谷区深沢 7-1-1

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター（ROPE）
　埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15 早稲田大学所沢キャンパス 100-427

印刷会社名　マザータンク

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

令和元年度スポーツ庁委託事業

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業

実践事例集